

わかものまんなか社会へ — 地域参画の事例集 —

序 若者をまんなかにする

神奈川大学人間科学部教授 齊藤 ゆか 氏

参加・参画のアラカルト

若者をつくる、お気に入りの空間
来た、見た、書いた —インタビューで出会うまちのあれこれ—
「ちょっとだけやってみない？」が、ひらく世界
「マイプロ」からはじまる、まちへの参画
大学が育む、未来への種
サポーター、というライフスタイル

COCORUかまくら／鎌倉青少年会館
知る、伝える。ボランティア／横浜市青少年育成センター
フレンズ☆SAKAE／Sakae Wakamono Creation2024
ふろぶろKananishi／FROM PROJECT
神奈川大学共通教養科目「体験型研修」
神奈川大学社会教育課程 かながわコースフォーラム実行委員会
県立青少年センター人材育成推進事業「ステップアップキャラバン」
／神奈川県子ども会連絡協議会

若者支援のアレンジレシビ

参画のはしごから
成長を可視化するふりかえり
若者とコーディネーターのためのQ&A

まちと、若者と

家庭、学校に次ぐ子ども・若者の第3の居場所、地域社会。

しかし、若者について考えるとき、実は家庭での困難に見舞われていたり、学校が忙しすぎたり、地域のつながりが希薄化しておりきっかけが掴めなかったりと、まちに若者の姿が見えにくくなっているケースが少なくありません。

一方で、若者にとって、まちでの体験、特に他世代との関わりは、社会をしなやかに生き抜く力を育み、主体的に他者に関わる意欲につながり、さらにはその後のキャリア観にも影響を及ぼす、大切な体験です。このギャップをどう埋めていくか。この視点こそ、「こどもまんなか」時代の神奈川県に、いま求められていることではないでしょうか。

参画のコーディネーターに向けて

今回、神奈川県青少年指導者養成協議会では、子ども・若者の中でも主に「若者」と呼ばれる高校生・大学生年代を中心とした世代に注目し、県域での特徴的な社会参画の事例を取材しました。その中で見えた、まちの様々なプレーヤーの心の動きや活動の工夫、また支援者向けのQ&Aなどをまとめ、「わかものまんなか社会 ―地域参画の事例集―」として制作しました。

取材の中で見えてきたことは、若者を応援すると地域全体が活性化すること。これを活用しない手はありません。若者の居場所づくりやまちづくり、そして支援者の企画づくりや仕掛けづくりのヒントに、本冊子をぜひご活用ください。

目次

序

若者をまんなかにする：大人ができること 神奈川大学人間科学部 教授 齊藤 ゆか 氏	3
--	---

参加・参画のアラカルト

CASE_01 若者をつくる、お気に入りの空間 COCORUかまくら／鎌倉青少年会館	8
CASE_02 来た、見た、書いた—インタビューで会えるまちのあれこれ— 知る、伝える。ボランティア／横浜市青少年育成センター	14
CASE_03 「ちょっとだけやってみない？」 が、ひらく世界 フレンズ☆SAKAE／Sakae Wakamono Creation2024	20
CASE_04 「マイプロ」からはじまる、まちへの参画 ふるぶろKananishi／FROM PROJECT	28
CASE_05 大学が育む、未来への種 ① 神奈川大学共通教養科目「体験型研修」	38
CASE_06 大学が育む、未来への種 ② 神奈川大学社会教育課程 かながわコースフォーラム実行委員会	40
CASE_07 サポーター、というライフスタイル 県立青少年センター人材育成推進事業「ステップアップキャラバン」 ／神奈川県子ども会連絡協議会	42

若者支援のアレンジレシビ

SPICE_01 参画のはしごから	50
SPICE_02 成長を可視化するふりかえり	52
SPICE_03 若者とコーディネーターのためのQ&A	57

序

若者をまんなかにする ：大人ができること

神奈川大学人間科学部教授 齊藤 ゆか

将来世代を担う若者を、私たち大人はもっと大事にしなければならない。彼らに、もっと優しい眼差しが必要である。それは、ユニセフが2016年に提唱した「子どもにやさしいまちづくり(CFC)」にも通底する。

しかし、自治体関係者は、子ども・若者育成支援に悩んでいる。大人の多くは、学校と家の往復しか知らない。子ども・若者時代を忘れ、彼らが何を考えているのか、学校外の場でどう育まれるか、具体的なイメージが湧かないのである。

本書『わかものまんなか社会へ―地域参画の事例集―』は、日本・神奈川で行われている「若者(中高生や大学)」の事例検証を行っている。われわれは、まず、現場でどんな取り組みが行われているのか、地域における若者の育み実践から学ぶ必要がある。

本書を読む際に、「若者」に関する3つの視点を紹介しておきたい。第一に、若者とは何者なのか。改めて「若者」の今の特質を捉えたい。第二に、私たち大人は、「若者」のココロとカラダをどう揺り動かせばよいのか。そのために、大人ができる仕掛け、条件設定や環境を提示してみたい。第三に、将来世代を担う若者の未来に向けた、若者政策へ誘いたい。

若者とは何者か

若者とは、何者なのか。どこで何をしているのだろうか。

いつからか、私たちは「今どきの若者は…」と口にする大人になった。こうした嘆きは、紀元前のヒッタイト帝国(現トルコ)の石板に「最近の若い者は…」と書かれていることや、古代ギリシャの哲学者プラトンが「最近の若者は目上の者を敬いもせず…」と語った逸話にもみられるように、昔からあることは有名な話である。したがって、まるでかつての若者が優れていたかのような言説はどれもあてにならない。ただ、私たち大人も、かつては「若者」だったのだ。

若者の類語として、「年が若いこと」・「若人(わこうど)」・「若輩」・「青年」がある。辞典によれば、若い(Young)は、「若い」・「幼い」・「年下の」・「若々しい、元気溢れる、はつらつき」・「新しくできた、新興の」・「未熟な、経験が浅い、不慣れ」の意を持つ。関連語として、「若気の至り」(深く考えないで、勢いに任せて行動すること)がある。大方はその経験者ではないだろうか。

要は、若者の未熟は当然のことであり、若者は、経験が浅く、不慣れで、未完成なのである。大人時代は飛ぶように時が流れるが、若者時代はスローモーションのように時が刻まれていく。若者は、「自分のため」だけに注力できる時間を持つ、という特質がある。

■ 若者の今

では、若者はこうした思春期及び成年前期を、どのように過ごしているのだろうか。

国立青少年教育振興機構(2024)の調査によれば、放課後や休日に保護者が子どもに活動的な時間の過ごし方を希望しているのに対して、青少年自身は家でゆっくりできる過ごし方を希望する傾向がみられることが明示された。デジタル化に加え、コロナ禍に拍車がかかり、子どもたちのリアル体験の不足が顕著となっていることも、いまこの時代の課題である。それは、自然体験や社会体験の不足ばかりではない。宿泊体験等を含む学校行事の中止や部活動の縮小も余儀なくされた。

コロナ禍の空白期間を子ども時代に過ごした若者に、その後の人生にどのような影響があるのかは未だ明らかになっていない。しかし、不登校の小中学生34.6万人(文科省 2023年)の数値は、過去最多を更新し続けている。義務教育を離れた高校生、大学生年代も同様の傾向であろう。こうした実態は、看過できるものではない。

今こそ閉じこもりつつある彼らを包摂する、「若者をまんなか」にする、新たな「まなび」の仕組みを考え直していかなければならない。

若者のココロとカラダをどう揺り動かすか

■ 若者のココロに寄り添う：自己と他者の受容

若者を理解するには、当事者（若者）から「聴く」ことが一番である。「聴く」態度は、傾聴手法が参考になる。例えば、聴き手が、相手の言葉を丁寧に頷いたり、繰り返したりすること。相手の話す言葉に常に集中すること。徹底的に相手の気持ちに寄り添う姿勢を持つことなど、共感的態度が求められる。つまり、個々人の嬉しさや悲しさを感じる、エモーショナルウェルビーイング（ポジティブな感情）を一緒に感じながら、気持ちを引き出していく暗黙知がある。しかし、話し好きの教師にとっては、傾聴は意外と難しい技と言えるいえるだろう。

筆者の経験によれば、若者は想像以上にナーバスで慎重である。何かを始める前に、心配や不安が渦巻き、躊躇する場面に出くわす。「自信ない→自信ある」、「こわい→大丈夫」、「できない→できる」など、ネガティブからポジティブへの転換には、「励まし」と「支え」が重要となる。その際、悩みを持つのは自分ひとりではない、同じ心持ちの仲間がいる、そのように感じられる失敗が許される安心できる空間（場）があるとよい。また、彼らを「待つ」余白の時間も必要となる。若者研究者の西村（2011）は、「癒し」による原点回帰（人間らしい感覚にリセット）がシフトチェンジと統合の契機となる、という。

若者の居場所づくりを先導する西野（2024）は、大人の『「ふつう」や『あたりまえ』から解き放たれる』重要性を強調する。「ありのままを受け入れる」、「肯定的なまなざしで見守る」、「信じてあげる」、「大丈夫！（という姿勢、声掛け）」など、子どもの命に寄り添うと、エネルギーが湧いて子どもたちは自然と動き出す、という。若者の自己理解や自己成長には、他者からの受容が不可欠となる。

ともすると、青少年の支援や指導に奔走する大人は、コミュニケーションが得意で、ポジティブで、自信に溢れ、タイムパフォーマンスを求める熱血派が一定程度存在している。だからこそ、われわれ大人は、若者のココロに寄り添う、優しい「まなざし」を持つことが大事なのである。この試みが、CFCにつながっていく。

■ 若者がカラダを動かす：心がワクワクする環境を整える

「食わず嫌い」とはよく聞く話だ。活動等に参加しないのは、その一種だと思われる。しかし、今を生きる若者は、自分の経験不足に既に気づいている。興味や関心がないわけではない。ただじっとうずくまっている、あるいは、何も考えないように努めているだけである。

それゆえ彼らは、静から動への「きっかけ」や「後押し」が欲しいし、誰かの声掛けを待っている。筆者は、こうした階層を「潜在的活動」層に位置付けている。例えば、ボランティアであれば、「潜在的ボランティア」層は6～7割程度いると目算している。「潜在的ボランティア」は、「役に立ちたい」という社会貢献意識はあるが、実際には活動していない層を指す（齊藤2022）。未来を創る若者に、心がワクワクするような、多様な出会いや経験ができる環境を整えるのは大人の役目といえる。その際、若者をお客にして、サービスを提供するのではなく、若者の「やりたい」を応援し、徐々にカラダを揺り動かす導きが必要である。あくまで、若者は「客体」ではなく、「主体」なのである。

よく、「若者が主役」、「若者が活躍できるまち」、「若者の参画」、「若者会議」を標榜するまちがある。しかし、若者は一足飛びに「若者参画」はできない。若者が、客体から主体へ、参加から参画へ、シームレスにつながっていくゆるやかな仕掛けがあるとよい。「仕掛け学」については、松村（2016）を参照されたいが、平たく言えば「つい引き込まれてしまうものが仕掛け」という。仕掛けには、物理的トリガと心理的トリガがある。筆者が特にユニークだと思う点を抜粋すると、「仕掛けと『遊べる』」、「『挑戦したい』と思わせる」、「気になる、楽しそう、ワクワクする、といったポジティブな期待（がある）」、「他者承認を導入する」など、好奇心をくすぐる仕掛けがよい。

上記を参考に、「いつ」・「どこで」・「誰が」・「誰に（と）」・「何を」・「どのように」・「どの予算で」の条件・環境設定については、事業担当者の力量に委ねられている。その際、人との出会いには、ダイバシティ（多様性）の視点が重要である。要は、性別や年齢、出身地や国籍など異なる背景を持つ人がいる方がきっとおもしろい。

未踏の未来にむけてアグレッシブに行動を

あらゆるものがネットでつながり、動かなくても、ゲームやスマホ動画やSNSで、音楽や映画を楽しめる世の中になった。わざわざ図書館に出かけなくても、人工知能（AI）が教えてくれる。お金をかけて旅行にいかななくても、バーチャルな空間のなかで世界中を旅できる。しかしながら、それはリアルな体験の機会を失わせるばかりか、やがて人とのかかわりが分断された社会へと変貌させる。若い時は二度無い。未踏の未来であっても、将来世代の若者には、もっとおもしろい場へ誘いたいものである。何より、失敗できる経験が必要である。また、アグレッシブに行動してほしい。それは、若者一人ひとりのウェルネスも高めることになるだろう。

国連が定めた「持続可能な目標（SDGs）」の達成を目指して、「質の高い教育をみんなに」届けるために、集い、学び合う居場所と機会が求められる。既に、EUでは若者政策（youth policy）の重点化が行われている。若者の意見表明が、若者政策の形成過程に結びつく「若者議会（Youth Council）」がある。とりわけ、ドイツ（正式、ドイツ連邦共和国）においては、青少年育成活動は100年以上の歴史がある。青少年育成活動は、「主体形成」と「民主主義教育」を支援することを目的とする（齊藤 2024）。こうした若者政策の先進国に、われわれは学ばなければならない。

さあ、私たちのまち、神奈川でどのような若者参画の取り組みがあるのか、各種事例を読みながら若者の再発見をしてほしい。

<参考文献>

- 国立青少年教育振興機構（2024）「青少年の体験活動等に関する意識調査（令和4年度調査）」
https://www.niye.go.jp/wp-content/uploads/2024/05/gaiyou_R4jijitsu.pdf（2025.3.3 アクセス）
- 文部科学省（2023）「令和5年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果」
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1422178_00005.htm（2025.3.3 アクセス）
- 西村 美東士（2011）「生涯学習における「癒し」研究の展望」『聖徳大学生涯学習研究所紀要』第9号、29-35。
- 西村 美東士
若者文化論ウェブサイト「若者文化研究所」
<http://mito3.jp/mukasi/>（2025.3.3 アクセス）
- 松村 真宏（2016）『仕掛け学―人を動かすアイデアのつくり方』東洋経済新報社
- 西野 博之（2024）『マンガで分かる！学校に行かない子どもが見ている世界』（株）KADOKAWA
- 齊藤 ゆか（2022）『ボランティア評価学』ミネルヴァ書房
- 齊藤 ゆか（2024）「ドイツにおける社会教育福祉学的な青少年育成：子ども・若者の貧困を中心として」『神奈川大学心理・教育研究論集』56、5-15。

齊藤 ゆか

Yuka Saito

神奈川大学人間科学部教授。専門は生涯教育学、ボランティア・NPO、生活経営学。「プロダクティヴ・エイジング」を生かした生涯学習まちづくりの実践・研究に取り組む。

現在、神奈川大学の社会教育課程において、学生の実践的な社会参画を数多く実現するほか、県域の地域の特色を生かした体験研修プログラムを開発、カリキュラム化し、学生のフィールドワークを通じ地域社会の課題解決を図る。

参加・参画のアラカルト

神奈川県域の、特徴的な若者の社会参画の実例

CASE_01 若者をつくる、お気に入りの空間
COCORUかまくら／鎌倉青少年会館

行政職員が
居場所施設を立ち上げる

CASE_02 来た、見た、書いた
—インタビューで会おうまちのあれこれ—
知る、伝える。ボランティア／横浜市青少年育成センター

ボランティア活動から
まちに関わりはじめる

CASE_03 「ちょっとだけやってみない？」が、ひらく世界
フレンズ☆SAKAE／Sakae Wakamono Creation2024

日常の居場所から
まちに関わりはじめる

CASE_04 「マイプロ」からはじまる、まちへの参画
ふるぶるKananishi／FROM PROJECT

行政と民間のタイアップで
まちに参画する

CASE_05 大学が育む、未来への種 ①
神奈川大学共通教養科目「体験型研修」

体験カリキュラムを通じ
まちに関わりはじめる

CASE_06 大学が育む、未来への種 ②
神奈川大学社会教育課程
かながわユースフォーラム実行委員会

社会教育課程から
まちに参画する

CASE_07 サポーター、というライフスタイル
県立青少年センター人材育成推進事業
「ステップアップキャラバン」
／神奈川県子ども会連絡協議会

地域の子ども会から
まちに参画する

世は「こどもまんなか」の時代。各地で青少年、すなわち子ども・若者施策が様々に展開される中で、乳幼児や児童の居場所づくりに特に力が注がれています。そんな中、行政としては比較的遅れをとってきた若者世代の居場所づくりに果敢にチャレンジしたのが鎌倉市。

『学校でも家庭でもない、中高生のためのもう一つの居場所。中高生が放課後や休日を使い思い思いに過ごすことができる。「中高生のやってみよう」を実現でき、新たな出会いやつながりの創出も生まれる場。』をコンセプトに、「COCORUかまくら」として、2024年にリニューアルオープンしたばかりの鎌倉青少年会館を訪れました。

COCORU（ココル）かまくら／ 鎌倉青少年会館

鎌倉青少年会館とは、「青少年に交流と活動の場を提供し、青少年の健全育成を図る」ことを目的に設置された施設です。鎌倉駅から徒歩30分弱の閑静な住宅街に位置しており、会館内には学童・アフタースクール「かまくらっ子」等他の機能も併設しています。

今回鎌倉市では、中高生が安心できる、チャレンジできる、人とのつながりを感じられる居場所の提供を目的として、会館内を音楽やダンス、自習等、自由に過ごせる場に、青少年会館広場をバスケットやサッカー等、自由に運動ができる場になるようリニューアルし、2024年11月10日にオープニングイベントを行いました。



「鎌倉青少年会館
リニューアルについて」
鎌倉市



(上) グリーンのある空間に、若者が一息つく姿、語らう姿を想像する
(中) 外観は昔ながらの「会館」の趣き
(下) Webページで閲覧可能な「COCORUかまくらができるまで」





(左) カフェのようなたたずまいのロビー。珍しいブランコ型のソファ（左端）は購入した一方、市職員による寄付の書籍、市役所の片隅にあった家具などを様々な組み合わせ活用している

(下) パンフレットの表紙からも、やさしいイメージが伝わる



居場所づくりのDIY

行政職員が語る「COCORUかまくら」スタートアップ

鎌倉市青少年課が運営する施設、「鎌倉青少年会館」は、中高生の居場所として2024年度にリニューアルオープンしました。

委託事業ではないため、実際にその実現に奔走したのは行政職員と当事者である若者たち。誕生したばかりの居場所を訪ね、青少年課職員のお二人に、立ち上げへの思いやプロセスについて伺いました。

立ち上げ前の課題

青少年課の事業のターゲットは「青少年」ですが、その定義は幅広いです。これまで青少年課がやってきた事業はどちらかというと、「放課後かまくらっ子」の立ち上げなど、小学生世代に重点が偏っていて、中学生、高校生に全然手が届いていなかったという状況でした。

青少年会館は「青少年の活動と交流の場所」となっていますが、リニューアル以前の中高生の利用率は3～4%程度。青少年会館には「放課後かまくらっ子」が併設しているので、小学生は使っていましたが、多くは貸館の利用として大人の団体が使うような施設で、そこに課題があると感じていました。

青少年課の事業として、ここ数年間は「放課後かまくらっ子」を全ての小学校区で実施することに力を割いていましたが、次は小学生より上の世代の事業が必要だということを考えていました。

市の総合計画や「鎌倉市子ども・若者育成プラン」にも、「青少年の居場所づくり」と「地域の担い手となる青少年の育成」というのが2本柱であると思いますが、中高生世代やもう少し上の世代に対してアプローチできていなかったんです。

「マーケティングリサーチ」！

そこで目をつけたのが既存の「青少年会館」ですが、ボトムアップで何か新規事業をやるには難しいところがありました。ただ、最初からリニューアルを推進したわけではなく、まずは中学生と高校生を対象にアンケート調査（令和4年度）や、『わたし』の居場所」をテーマに講演会（令和4年度）を実施しました。そういう土壌づくり、雰囲気づくりに費やしたのが数年間ありました。

中高生対象のアンケート調査は全体で約3,000件の回答が集まりました。その中で「家と学校以外に安心できる場所がありますか？」という質問に対して3人に1人は「ない」という回答で、さらに4人に1人が「学校への居場所感」についてネガティブな回答だったんです。これがリニューアルに向けた一つの推進力になりました。

そこで令和5年度には「鎌倉青少年会館リニューアル実行委員会」を立ち上げて、「青少年会館がリニューアルするとしたら、どういう場所になってもらいたいのか」ということを、中学生、高校生の子たちに考えてもらいました。

加えて、社会的にも不登校の増加や「助けてが言えない」などの課題が取り上げられていたり、こども家庭庁の「こどもの居場所部会」が発足したりする動きもあり、さらに鎌倉市として神奈川県に準じた「鎌倉市こどもまんなか応援サポーター宣言」を出す中で、議会の方からも「子どもの支援」や「こどもの居場所」への声が上がってきていた頃でした。

その機運の中、鎌倉市では『かまくらまるごと子育て・子育て戦略—きらきらプロジェクト—』を計画し、令和6年度から順次やっていこうという動きがありました。それは既存の枠の予算ではなく、枠外の予算で要求ができたので、これには乗らなきゃと、青少年会館のリニューアル費用を令和5年度に積みました。それでやっと今年度を迎えられた…という形ですね。



オープニングイベントで用いた看板は、実行委員の手による作。文字は立体感がある

若者をつくる空間

鎌倉青少年会館リニューアル実行委員会は令和5年度に立ち上げて、公募をしたり、「放課後かまくらっ子」で繋がりのあった子に声をかけたりして、中高生7人で構成しました。夏休みに3回、冬休みに2回集まり、「居場所って何だろう?」とブレインストーミングなどを行いました。

リニューアルを考えるにあたって、同じ中高生でもいろんな人がいることを知ってほしかったので、「この子にとって居場所って?」、「この子ってどういう子なんだろう?」、「居場所ってどういう場所なんだろう?」みたいなことを自分たちで考えてもらい、それらを経て「居場所ってこういうのが必要だよ」から「鎌倉では何が必要だろうね?」っていうことを考えてもらったり、青少年会館の各部屋のコンセプトとかを考えてもらって、「じゃあ実際に何を置いたらいいかな?」「どんな雰囲気部屋だったらいかな?」という風によっていきました。

気軽にスポーツができるようにしたいという意見もあったので、外のグラウンドにバスケットゴールとサッカーグラウンドマークの整備を計画し

ガバメントクラウドファンディングもやりました。

目標額は300万円でしたが、130万円ほど集まってバスケットゴールを作ることができました。このように自分たちが言った考えが反映される、「自分たちで作った」という感覚を持ってもらいたいです。

行政の中で進めていて思うこと

単純に中高生がやりたいことをボトムアップで反映させるのには課題もありました。青少年が望んでいるからというだけで家具を買ったり、鎌倉市の名前を使ってクラウドファンディングをしたりということは通常はやはり難しいです。

今回は「きらきらプロジェクト」をやろう、とトップが判断してくれたのは大きかったです。それがなかったら青少年課の事業費の枠内でやることになるので、今やっている事業を削ってこちらに振り分けるというのは難しいですね。

今回は流れに乗って「COCORUかまくら」を立ち上げることができましたが、事業継続には予算をつけなくてはなりません。しかし、事業継続にこれだけ必要ですっていうことをわかってもらうには現場を見ていただかないとなかなか伝わりません。今、意思決定の立場にいる団塊ジュニア世代の方々は、周りにたくさん若者がいる青少年期を体験していて、行政が若者の居場所を用意する時代ではなかったで、「行政がやることなの?」という思考がベースにあるような気はしています。

「行政がやらないといけない」というところをいかに説得できるか。ここがこれから求められることだと思います。



(上) 受付にはかわいらしいオーナメントが。実行委員会で決めた「COCORU」という名称は、フランス語で「お気に入り」なんだとか

(左) 小学校の校庭ほどの大きさがあるグラウンド。様々な使い方が期待できそう



お話を聞かせていただいた鎌倉市青少年課の課長と主担当のお二人。
常に地域の若者を中心に考える姿に感銘を受けました

数値で示す

事業として取り組む以上、効果検証は不可欠です。リニューアルオープン前の延べ利用率をみると、半数以上は30歳以上の大人で小学生が40%ぐらいと、中高生の利用が少なかったのでも数字としてわかりやすく、その比率を上げていく幅を年度ごとに設定したいと思っています。

例えば中高生の「何パーセントが使っている」などもあるといいと思いますが、市内在住、市内在学、市外在学などいろいろあるので、中高生全体の正確な数字を出すことが少し難しいと感じています。それに対して利用者登録数や利用数は数字として出しやすいです。5年間ぐらいで中高生の利用が徐々に増えて根付いていくことを期待しています。

専門の相談員は置けないですが、家でも学校でも言えないような相談や愚痴などを拾っていきたいとも考えています。学生のユースサポーターやスタッフと仲良くなって、小さな助けてが言える、子どもたちの心の不調の予防になる場所にもしたいです。そういった相談、ここだからキャッチができたということも数値に出せる可能性はあるのかなと思っています。

また、アンケートの中でポジティブ回答が見られたらいいと思います。放課後に行っているとか、他の学校の子と仲良くなるきっかけになったというような声が出てくれば必要性が伝わるのかなと感じますが、数値化が難しい部分でもあります。

オープンな場でありたい

数値的なこと以外に「その施設ができてよかったね」、「やっぱりあった方がいいよね」、「もっと盛り上げたいね」と、地域に馴染んで、地域全体の雰囲気や醸成していくと根付いた、成功したって言えるんじゃないかなとも思います。

「青少年の居場所」と銘打つと、青少年問題協議会や保護者さんなどからは「不登校の子が来られるような場所」という言葉が上がるんですけど、青少年課の事業は「青少年は誰でも来ていいよ」という

ところが基本です。だからCOCORUかまくらに来たら支援がもらえるとか、何か助けてもらえるみたいなおところではなくて、最初は誰にでもオープンで、そこでいろんな関係性を築いてもらって、その信頼関係の先にボロッと何か出てきた時、家のこととか学校のこととか、自分が抱えている悩みが出てきた時に、それをつないでいくっていうんですかね、そういうことは考えています。

スタッフをどう確保するか

相談の事例もそうですけど、ユースセンターのスタッフとして中高生とかかわることを市の職員がやるとなると、プロじゃないのでわからないから委託しようと思えることが基本なのかなと思いますが、今回立ち上げ段階は市の直営で始めています。

鎌倉市のおもしろいと思うところが、外部人材を職員にするとところなんです。そういう人が立ち上げの段階にいるとか、民間の考え方を取り入れて職員のマインドを変えていくみたいなのがあるなと思っています。リニューアルにあたっては、「中高生のためのもう一つの居場所」について、ノウハウが全然ないので、コンサルタントは入りたいと考えていました。

自治体にはこういう青少年に関心のある職員が元々いるとは限らないので、そういう時は予算や仕組みとの兼ね合いですが、外から職員として入れるというやり方もありますよっていうのが一つあります。今回も行政職員として動かしていくときに、プロからアドバイスをもらいながら進められたので立ち上がりまでできたというのはあります。

先のことを考えても、運營業務を引き継ぐだけでも大変なのに、中高生への声かけをどうするか、関わり方はどうかというのはプロがいないと難しいです。行政職員が直営でやる場合は、組織として持続可能な方法を考え、共通理解を持ちながら進めていく必要があります。



いつでも行っていい場所に

リニューアルオープンしましたが、現状はほとんどの人が青少年会館自体を知りません。成人の集いでとったアンケートでは、青少年会館を知らないし、別に行きたいと思わない、知っていても学童やデイサービスのイメージが強い、そんな建物です。

青少年課でも、青少年会館、COCORUかまくらを中高生がメインに使う場所にしていきたいですが、多世代交流の場とする要望もあります。

私たちとしては、オープンしたてですし、まずは中高生の定着を優先する考えです。中学生、高校生たちは青少年会館が「自分たちが行ける場所」と思っています。「あそこって小学生が行っているよね」とか、「中学生が行って何できるか全然わからん」、のような感じです。だからまずは、中高生が使える、いつでも行ってもいい場所だ、自分たちが行って楽しめたり安心できたりする場所だ、と定着させることを優先しようと思っています。

地域の方からは、「中高生に対して何かやってあげたい」、「自分は〇〇ができるから、教えられよう」などの声をいただきます。本当にありがたいですが、まず中高生の子たちがここに集まって「こういうことがやりたいな」、「〇〇したい」という声が出てきた時につなげたいと思います。最初から大人が主導して「はい！〇〇を教えてくださいの人が来ました！」というようなことはあまりやりたくないです。

中高生がメインの空間ではあるので、反対に小学生には「中学生になってから来てね」などの声かけをしています。ただ元々は小学生の方が青少年会館を使っていたので、「小学生は夕方5時まで使えるよ」ということと「それ以降に来るなら中学生や高校生と一緒に来てね」という風に運営しています。

小学生だけではなく大人の方も、以前から施設を使っていた人とうどう折り合いをつけていくかは今の課題としてはあります。

まだオープンしたてなところがあるので、これからどんな子が来るかはわかりませんが、ダンスをやっている子が鏡を使って練習できることをすごく喜んで、オープン前から使ってくれていました。鏡もそういった使い方のために買ったものだったので、中高生が使いやすい場所だということが広がっていくといいなと思っています。

卓球をしにいつも来ている子は、「(存在が)これバレたらめっちゃ来るんじゃない?」とか、居心地がいいから「このままあまり知られないように」とか言っていましたね。

近くには中高生が遊ぶところがありません。お金を払ってスタバに行ったり、大船駅や横浜駅まで行ったりしているので、近くに集まれる場所ができて嬉しいと言っていました。中高生同士の口コミでも、広まっていくいいと思っています。

(聞き手 専門部会委員 南 太貴
事務局職員 狩野 陽士
事務局職員 長南 悠太)



“COCORUかまくら”のような中高生が集まる拠点のことをユースセンター、そこで行われる実践のことをユースワークと言います（※1）。こども家庭庁が発足してからこのユースワークの取組みに注目が集まっていますが、取材の中でもあった、ユースワークは「行政がやることなの？」という問いに対して、色々考える余地はありそうです。みなさんはどう考えますか？「行政がやる理由はこれです」と私も自信をもって提示ができるわけではありませんが、みなさんと考えるきっかけになればと思います。

さて、青少年育成の領域の中で、取材の冒頭でも「小学生世代に重点が偏っていて…」と話す通り、小学生が対象の取組みはイメージしやすいかと思います。キャンプなどの体験活動、学童などの放課後のあそび場…地域の中で子どもが安心して遊び、すくすくと育つ場所をつくる、そういうことに対してNOという人は多くありません。

この文脈からユースワークの価値について考えていきたいと思います。まず中高生にとって体験活動が必要か考えてみましょう。学校で受ける国語や数学などの学習と違い、身体を通して学習していくことを体験活動・体験学習といいます。中高生の体験学習と言えばボランティア体験や農業体験なども印象に残っている方も多いのではないのでしょうか。学校現場ではアクティブラーニングやアイスブレイクなど、体験学習の要素が含まれている授業のスタイルが普及していることから、体験学習の価値は年齢に関係なくあると感じます。

ただ、中高生の成長や教育の領域は学校に集約されて行なわれがちです。ボランティア活動も夏休みの課題として扱われたり、カリキュラムの中で体験活動などが提供されたりしています。これが不要と言いたいわけではなく、ポイントは学校教育に内包されてしまうと義務的な部分が大きい体験学習になってしまうということです。小学生の体験活動は学校内ではなく余暇の中で遊びやキャンプの機会があったのではないのでしょうか。

中高生にとっても余暇の中で選択した体験というのは大事です。皆さんに想像してほしいのですが、自分のアイデンティティを話すとき、自主的に選択した経験をもとに話す方が多いのではないのでしょうか。例えば就活の面接のときに「ガクチカ」（：学生時代に力を入れたこと）としてボランティア活動について話すときでも、自分で選択して活動したから「これが私のガクチカです！」と自信をもって語れると思います。つまり自主的な体験活動の機会は若者の前向きなアイデンティティ形成に大きな影響を与えています。

（学校教育でのよい体験活動は、自主性を保証する仕組みがあったり、次の自主的な体験活動のきっかけとして機能していたりします）。

ここでユースワークの話に戻します。『ユースワークとは、おもに10代の子ども・若者の育ちを地域コミュニティで支える活動である。学校教育がフォーマル教育と呼ばれるのに対して、インフォーマル教育と呼ばれることもある。子ども・若者は自分の意思で自由に場に参加し、そこで働くユースワーカーと呼ばれるスタッフや他の若者と共に、自分がやりたい活動を楽しむという「自主性（voluntary）の原則」がユースワークではもっとも大切にされている。（平塚真樹(2023)』

ユースワークの定義は社会や若者の違いから国や地域によって語り方が変わりますが、インフォーマル教育（※2）や自主性という要素は共通して見られます。

家や学校から離れた余暇の時間にユースセンターを使ってもらおう。“COCORUかまくら”で中高生が放課後に友達とダベったり、休みの日の待ち合わせに使ったり、一人で来てゲームをして遊んだり…。目的があってもなくても、自分自身で行くこともやることも選択ができる場所がユースセンターです。いわゆる居場所と言える場所かもしれません。そんな“COCORUかまくら”で新たな人と出会い、友達になったり、初めましてで終わったりするなど、ここで起こる出来事は一種の体験活動です。多様な人が集まる場所でスタッフのユースワーカーが様々な仕掛けを行ない、中高生自身のアイデンティティの形成につながる体験を保障する。その体験の中で中高生は自分自身の輪郭を獲得していくのではないのでしょうか。

ただし、若者自身の選択が軸にあるため、量的評価も定めにくく、質的評価も何を持って良しとするかは悩みどころです。そういった面では行政との相性は悪いかもしれません。

改めて“COCORUかまくら”のような中高生が集まる拠点の運営、ユースワークの取組みを「行政がやることなの？」という問いに対して、みなさんはどう考えますか？

（専門部会委員 南 太貴）

（※1）一般的にユースワーク（ユースセンター）の対象は中高生に限定していませんが、この文章ではイメージしやすいように中高生が対象と捉えられる書き方をしています。

（※2）インフォーマル教育：あらゆる人々が、日常的経験や環境との触れ合いから、知識、技術、態度、識見を獲得し蓄積する、生涯にわたる過程。組織的、体系的教育ではなく、習俗的、無意識的な教育機能である。

（文部科学省：多様な生涯学習機会の分類について）
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo2/010/siryo_u/_icsFiles/afieldfile/2015/06/24/1359174_3_2.pdf

来た、見た、書いた

—インタビューで出会う、まちのあれこれ—

#知る、伝える。ボランティア／

#横浜市青少年育成センター



(上)取材での一コマ。オンラインコミュニケーションツールを活用しつつ、まちを歩く体験も大切にしている

コロナ禍の2020年、横浜市青少年育成センターも例年通りの事業を実施することが難しく、「次世代人材の育成」にかかわる取組みも手探りな状態でした。そこでZoomなどのオンラインコミュニケーションツールが充実してきた、同年11月に『オンラインで「子ども・若者の居場所」や「地域の情報」などを取材し発信するボランティア』を募集したのが「知る、伝える。ボランティア」の始まりです。

知る、伝える。ボランティア

「知る、伝える。ボランティア」は「子ども・若者」、「まちづくり（地域活性）」などにかかわる横浜の個人・団体を若者ボランティアが自分自身の目線で取材するボランティアです。取材をもとに制作した記事をメディアプラットフォーム「note」などに投稿してアーカイブ化することにより、地域活動の解像度を上げる一助となることを目指しています。参加する若者は大学生が中心で、広報的な活動として参加してもらっています。

地域の活動団体を取材、SNSで記事を発信

知る、伝える。

ボランティア



記事発信 note

〒231-8454
横浜市中区住吉町4-42-1 開内ホール地下1階
公益財団法人よこはまユース
横浜市青少年育成センター
Tel: 045-664-6251



(左)様々な人材の取材を通してまちへの理解を深める

(中)執筆した記事をnoteで公開することで、地域側も広報や活動をふりかえる機会に

(右)参加者の興味の高まりに応じ、発表などプラスアルファの機会が生じることも

取材という、ボランティアのかたち

元参加者が語る 地域へのはじめての一步

コロナ禍のさなかに立ち上がった「知る、伝える。ボランティア」の元参加者で、現在行政職員として地域に関わっている2人のOB・OGが、当時の様子について語ります。

若者の社会参画の第一歩、「まちとの出会い」がボランティアという入口から成り立っている点が特徴ですが、コーディネーターによる仕組みづくりにも思いを馳せたくなるお話です。

ボランティアの入口

大学が社会学部だったので、取材して相手の話を聞くというのをやってみたいな、色々聞けるし楽しそうだなと思って参加しました。昔は文字を書くこと、自作で新聞を作ることなんかも好きだったので興味があって。自分が取材した内容を自分だけの言葉に表すことができますし、他のボランティアの人の記事から、同じインタビューでも違う表現、感じ方を知る、そういうのもいいなって思っていましたね。

当時はコロナ禍で、人とのつながりが絶たれた中、地域や同じ興味を持つ人とつながりたい気持ちもありました。

ボランティアの居心地

最初は地域の方を青少年育成センターで取材する単発でしたが、次は別の方を取材して地域を訪ねる形、今度はさらに別の地域イベントを体験取材する形というように、段々と深く関わる形になっていきました。期間も長くて、サークルに近かったです。ただ誰かが仕切るわけではなく、同じ仲間という感じがして楽しかったですね。

大学生が主体の居場所づくりやNPO的な活動をやっている団体もありますが、よくない意味でサークルチックになることもあると思うんです。どういうことかと言うと、固定化したメンバーの中で活動するとか、上下関係が生まれて「報告する」、みたいになるイメージですね。取材という活動は、取材の対象が必ずいるので、固定化した関係になりにくく、もう少し地域の人と一緒に何かできるような気がしています。

このボランティアの一番いいところは、自分の好きな時に好きなだけ参加できることでした。サークルの場合メンバーが固定化しがちですけど、このボランティアだと好きな時に参加できるので毎回メンバーが違うんですね。取材先もその時々で選べて、自分の興味がある団体さんの取材に行ったり、反対に元々はあまり興味がない分野だったものの、たまたま取材に行った結果、その分野が気になり始めたり、色々な人・ことに出会えることが魅力かなと思います。



地域に思いを持つ、様々なプレイヤーからお話を伺い、noteに記事を掲載する

朝が早かった時もありましたけど、無理なく行くことができました。コロナのために学校がなかった分、第二の学校みたいに感じていました。何だろう、いい表現がないんですけど、遊びに行くでも、旅行に行くでもなくて、どこか自分のミッションとして捉えていたところがありましたね。

アルバイトとも違って、「なんかちょっと今日は嫌だな…」というようなこともなかったです。「行きたくない」と思えば行かなくてもいいんですけど、取材はその日にしかできない気がしていました。「この機会を逃したら自分にはできない気がする」という気持ちで、だからといって「今行っておかないと！」というほどの義務感もないんですけど、今考えるとただ単に「経験しておこう」みたいな気持ちだったのかもしれない。その後の人生で、地域の人を取材する、みたいなことがあるかもしれないですけど、仕事となるとまた立場も違いますし。

ただ、公務員として働いている今は学生のときに大人のひとと話していてよかったなって思いますが、当時「絶対にこの経験が必要でしょ」、とは特に思っていなかったですね。

コーディネーターの立ち位置

当時はコロナ禍で外に出られない、人と話せないという中だったので、同じような学生や地域の人と関わる機会が持てたのは楽しかったです。アルバイトとも違って、ちょっと学校みたいでしたよね。

青少年育成センターに対しては区役所のような「公的」という感じであまり見ていなかったのですが、最初に入る時は緊張しましたが、2回目からは気軽に行く場所という感覚ではありました。

活動にはコーディネーターで南さんが付いてくれました。初対面の印象は、思ったより若い、でしたね。最初のイメージは地域のサッカークラブのコーチのような、指導者ポジションですけど、すごく堅いわけでもなく親しみがある感じです。雰囲気としては、事前に想像していたよりシャキッとしている、という感じでした。

コーディネーターはもちろん親ではないですし、先生に近いんですけど、先生ほど宿題やられて

「少しでも地域のことが気になっていて、
でもなかなか一步を踏み出せないよっていう人に
参加してほしいです」



青少年育成センターや地域の施設で取材した内容をもとに記事をまとめていく。地域で実際の活動の中に入ることも

いうわけでもない。解答を出す、渡すわけではないですが、その方向に導いてくれる感じがあります。高校の部活動の顧問みたいな雰囲気でもないし、サークルの先輩でもない。大学の教授みたいに堅苦しい感じでもないですし…雰囲気は大学の職員が近いかな、と思います。

南さん（コーディネーター）が学生と地域との間にいることは大きかったです。いきなり学生が、「地域のイベントに入りたいです」と言いに行っても、うまくいく可能性がそんなに高いとは思えません。「急に言い出して何だ？」となると思うんですけど、よこはまユースの南さんから話したら「なるほどね」となりやすいと思います。その入口次第で、ボランティアたちが地域での活動をどこまでできるかわ変わってくるかなという気はします。

学生が自分たちだけで地域に対してアクションをかける場合は、目的が決まっていって「この辺までやるよ」という部分が明確になっていたら動けるかもしれません。例えばいろんな団体が出ているイベントに、よこはまユースボランティアとしてブースを出展するというのもおもしろそうだなと思います。

取材のアポイントメントについては、自分たちでアポイントを取った方が体験としていいのではないかなと思いますが、こういう理由で、という後ろ盾がないとやっぱり上手くいかない気がします。見ず知らずの他人にいろんなことを話したいとは思えないと思うんです。そういう意味で、南さんっていう窓口があると取材される人は安心して話してくれると思いますね。

取材の経験値

このボランティアは合う、合わないがあると思うんですけど、少しでも地域のことが気になっていて、でもなかなか一步を踏み出せないよっていう人に参加してほしいです。実際に地域を見ないでそれを思っているよりは、コーディネーターがいる安心できる環境の中で、地域の人が実際にどんなことをやっているのか見た方が経験値になるのではないかなという思いがあります。

自分自身にとっては、取材をすることそのものが知識を得る一つの構成要素になっていて、いくつも経験することでストックが増えていきました。子ども食堂をやっている方の中でも、外国人の方もいたし、長くやっている方もいたし、いろんな人生の歩みがあります。そういう様々な経験が頭のタンスの中にストックされていく感じです。その経験から、自分が全くその人の経験はしていないけど、同じような人がいた時に少しその人が理解できるような感じがあります。

いま、公務員として

今は、大学生としてプライベートで地域に関わっていたときは違って、いろいろな計画がある中で仕事として動かなくてははいけません。自分が「こうした方がいいんじゃないか」と思ってもできなかったり、しがらみが多い部分もあったりして、なんでも自由に動けるわけではないというのは感じます。

「ボランティア当時、もっと楽しんで 関わっていたことを 思い出しました」



麦田元気朝市祭の体験取材

横浜市中区麦田町で麦田町発展会の方々が主催する「麦田元気朝市祭」に「知る、伝える。ボランティア」も関わらせていただきました。



基本的に、取材結果はnoteで記事としてレポート。「麦田元気朝市」の取材では、新聞形式でも制作するなど、アウトプット方法もボランティアたちで工夫している

地域のひととのコミュニケーションでも、仕事では「いやそこまではちょっと答えなくていいかも…」、「そこはもう個人にがんばってもらって、その人が自分で探した方がいい」というようなこともあります。学生のときは、会った人に聞かれたことは何でもかんでもできる範囲で答えていましたね。今は自分が答えられそうでも、そこまで答えなくていいというか、あまり答ええない方がいいこともあるので、その線引きが結構難しいです。

仕事ではお年寄りに関わることも多くて、地域の支援センター等の公共施設とも電話でやりとりしています。学生の当時、体験取材で参加したイベントに来ていた公共施設の職員さんたちが、きっと地域でおじいちゃんおばあちゃんを支えているから、自分たちの今の仕事も成り立っていると感じます。それを知らないと、職員さんの存在をあまり意識しないかもしれませんが、当時の取材があったから、支えていただいている実感があります。こちらでも安心できますね。

楽しむことを忘れたくない

仕事の中では、地域イベントにも関わっています。ボランティアで経験した地域イベントと同じような感じなんですけど、自分が材料や物品を揃えたり、契約をしたり、下準備をしていく中で、どうしても仕事、仕事…ってなってしまっていて楽しむ気持ちを忘れてしまったことがあったんですね。

イベントを成功させなくてはとか、失敗してはいけないとか、そういう気持ちが強くて楽しむ気持ちを忘れてしまっていたんです。仕事で関わったお祭りのようなイベントは、提供する側ともらう側、のようになってしまっています。行政側の私たちは、会場を提供して当日うまく回転させたりとか、出展団体とはお金のやりとりばかりに気を遣ってしまったりとか…お祭りもなんだか普通の商業施設と変わらない感じになってしまっているのかもしれないと思って。お店を増やすことが目的になって、どれだけ売れるかとか。

一時期ちょっと辛くなっていたんですけど、ボランティア当時の経験を思い出すと、もっと楽しんで関わっていたことを思い出しました。今の仕事の立場とボランティアとはやはり違うとは分かっているんですが、ボランティアの楽しい純粋な気持ちを置いてきてしまったなって、その時しみじみ思いました。

「知る、伝える。ボランティア」は、振り返ったときに自分も楽しまなきゃなって思わせてくれるような、そんな素敵な経験だったなって思っています。

（聞き手・構成 専門部会委員 南 太貴
事務局職員 長南 悠太）

エディタース

ノート

課題解決をしない
ボランティア



(表1)「知る、伝える。ボランティア」の活動資料より

この活動で生まれるもの			
	取材する	記事を書く	ミーティング
三人称 (社会) 私が社会を知る 取組み理解 時事理解・社会認知			
二人称 (あなた) 私があなたを知る キャリア理解 想いの理解・他者理解			
一人称 (わたし) 私がわたしを知る 自己理解			
「私が」	知る (インプット)	伝える (アウトプット)	生み出す (クリエイティブ)



(上) 活動のスタートは横浜市青少年育成センターで。青少年向けの様々な情報に触れられるよう、工夫されている

横浜市青少年育成センターとして「知る、伝える。ボランティア」を行なう目的は、地域で青少年を支える「次世代人材の育成」を達成するためです。そのため、若者がボランティアを体験してどうなっているのかを考える必要があります。一般的に地域の担い手が生まれるイメージは、若者が地域参画し社会に何か価値を生み出すこと、地域の中で「若者の力」を発揮してもらうことですが、それをするためにはあらゆるハードルがあります。

例えば若者が地域の中で「子どもの学習支援活動」をやりたいとなったとき、どんな学習支援があるのか、どこでやるのか、何から始めるかなど考え始めたらきりがありません。大学に拠点がある部活やサークルとは違い、若者にとっての地域(社会)は遠いのです。

若者が地域参画するためには「知る」ことでインプットし、そして言語化して「伝える」、その先に「生み出す」という段階があります。また、この段階にも「自分」・「他者」・「社会(地域)」というような対象の違いがあります。表1はそのことを図示したのですが、右上の「私が社会に(を)生み出す」ことをするためにはそれ以外の部分も育てていく必要があると感じています。

このボランティアの「取材して記事に起こす」体験を通して自分と社会のつながりを感じ、自分の志向を確認する。その過程をミーティングでも補完していくことで、地域の中で「若者の力」を発揮してもらう土台ができていきます。(もちろん、最初から地域参画していく中でインプットとアウトプットを経験し、若者がコミットして力を発揮してくれる場合もあります。)

「知る、伝える。ボランティア」は一般的なボランティアとは違い直接的に課題解決・支援をするわけではありません。例えば町のゴミ拾いや子どもへの学習支援のように「ゴミがこれだけ拾えた」、「子どもがこんな点数取れるようになった」などと違い、目に見える達成感を感じづらい活動です。ただ、地域活動を記録に残すことも同じくらい大事なことですし、地域とのかかわりが希薄になりつつある若者が、「知ることから地域につながる」、そういう地域の入り口も必要なのだと、このボランティアから感じています。

(専門部会委員 南 太貴)



(上) ボランティアではあるものの、この活動の実施に地域の方々の協力が欠かせない。取材の調整などにコーディネーターとして職員が入っていく



インタビューでも記憶に残ったと言及があった、トニー・ジャスティスさんが運営する子ども食堂、「ノヴィーニェこども食堂」の取材資料より

(上) 横浜市青葉区にある子ども食堂。ボランティア参加者は、ベイエリアだけでなく、市内の様々な場所に赴く
(右上) 食事を分かち合う文化がある、ガーナ出身だからその視点で日本の見えない貧困に一石を投じる
(右下) 多様化する食環境のなかで、様々な立場の子どもたちが食べやすい「食のバリアフリー」を目指している

(資料提供) ノヴィーニェこども食堂&こども寺子屋 (NPO法人アフリカヘリテージコミティー)

エディタース ノート

コーディネーターとして語る
若者との関わり方

今回インタビューに答えてくれた「知る、伝える。ボランティア」のOB・OGには、心からありがたく感じています。ボランティアを卒業してしばらく経ちましたが、ボランティアとコーディネーターという関係性でなくなっても付き合いがあることは本当に嬉しいことです。

さて、ここではコーディネーターの立場で取材の内容を解きほぐしていきたいと思います。

まず、ボランティア参加者との初めまじりの場についてですが、「知る、伝える。ボランティア」に参加申し込みがあったとき、私はすべての申込者とオンラインで面談をしています。そこで活動の説明をしてイメージとのすり合わせを行ない、面談後に参加するかしないか決めてもらっています。

何より大事なことは、お互いに知り合うという時間にあるということです。インタビューの中でも「思っていたより若かった」という発言がありましたが、申込者の若者にとってボランティアの主催者(地域の大人)は未知な存在なので緊張していると私は考えています。一方的に活動の説明をするだけでなく、雑談も意識するようにしています。

また、面談の設定も気をつけています。最初のステップで「話をしたいから青少年育成センターに来て」というような「行ったことのない場所で知らない人と話す」状況は作らないようにしています。そういう時にオンラインツールは有効で、若者の参加のハードルを下げて知り合いになることができます。

もう一つ、インタビューにあった「自分の好きなときに好きなだけ参加できる」、「そんなに『行きたくないな』と思わずに行っていました」という発言も、私がコーディネーターとして大事にしていることを表していました。

前述した活動の説明のときにボランティアのみなさんをお願いしていることとして、「自分ができる範囲で参加してください」、があります。

私はボランティアに参加する若者に、学生の時期だけではなく社会人になっても地域に関わってくれと嬉しいなと思っています。ただ、現状としては、ボランティア活動というと学校の課題などの学校教育のコンテンツとして扱われがちで、義務的な要素が含まれてしまいます。しかし本来、地域の活動は自分が選択できる権利としてあるもので、自分の余暇の中であるものではないでしょうか。

「参加する権利はありますが、義務ではないので、自分のペースで参加してみてください。他のことで忙しければ無理する必要はないですし、本を読みたければ本を読むように、活動したければ活動してください。休むことやできないことを後ろめたく思わなくて大丈夫です。ただ、団体として動く面があるので、連絡はしっかりとしてください。それだけが唯一のルールです。

このことはボランティア皆さんに伝えていきます。大事なことはみなさんにこの権利があることです。だから他の人の休む権利も尊重してほしいですし、余裕があったらその人の担っている部分をカバーしてくれると、みんなが居心地のいい活動になると思うので協力してやっていきましょう。」

私はこのように、面談の際に話します。そういう雰囲気を作っていくことが、若者自身が本当にやりたいことにフォーカスでき、力を発揮する方法を身につける近道になるのではないかと考えています。

(専門部会委員 南 太貴)



「ちょっとだけやってみない？」が、ひらく世界

#フレンズ☆SAKAE／

#Sakae Wakamono Creation 2024



子ども・若者の居場所づくりが議論されるとき、必ず語られるロジャー・ハートの「参画のはしご」。そこには地域社会への参画の度合いを高めていくスモールステップが示されており、地域の大人たちはそれをみて若者のまちへの積極的な関わりをすぐに期待してしまうものです。

ただ、若者たちにとって生活の場である居場所は、家庭や学校を離れてそこに安心して居られるということ、そのものが最初のステップ。主体的な参画のステージに歩み出す、最初の一步を探してある居場所を訪ねました。



フレンズ☆SAKAEの施設。開放感のある表側でワークショップなどが行われ、実家のような裏側ではくつろぐ姿も。どちらもフル活用

フレンズ☆SAKAE

横浜市栄区本郷台に位置する青少年の地域活動拠点、フレンズ☆SAKAE。徒然草の作者、兼好法師が和歌を詠んだことでも知られるいたち川にほど近い、のどかな環境に利用者の声が絶えない居場所があります。

横浜市の青少年の地域活動拠点は、平成19年の要綱制定以来、青少年の交流や社会参画の場として機能を拡大しており、現在全18区のうち7区に設置されています。そのうちフレンズ☆SAKAEは、子育て中の親子、青少年、障がい児・者といった幅広い対象を支援する4つの機能を有する複合施設、さかえ次世代交流ステーション内にあることが特徴です。

各施設を運営する社会福祉法人、「地域サポート虹」と「訪問の家」の2つの団体が、各機能の提供にとどまらず、年代や障害の有無にとらわれない利用者相互の交流や支援者との連携を図りながら運営をしています。

Sakae Wakamono Creation 2024

フレンズ☆SAKAEのもう一つ特徴的な取り組みが、「ティーンズクリエイション」、いわば地域ぐるみの若者の芸術祭。近隣のアート活動団体や他の青少年支援団体等とともに2012年に活動を開始し、2018年からは「ティーンズクリエイション組織委員会」を構成して企画しているもので、10周年にあたる今年度は「Sakae Wakamono Creation 2024」として実施しました。

中身は近隣地域の中高生世代の作品展示部門「ティーンズクリエイション展2024」と、高校生～20代前半の若者を公募して行う創作舞台の2本立て。県立地球市民かながわプラザ（あーすぶらざ）を舞台に、12月に作品展示部門とプレ公演を含むライブ、1月に創作舞台部門の本公演を実施しました。

作品展示部門

ティーンズクリエイション展 2024

創作舞台とリンクしたテーマ、「内なる自分を探す旅 一見えている自分と本当の自分」をテーマに、中高生世代を中心とする若者の文化作品展示、ライブパフォーマンス（ダンスパフォーマンス、創作舞台部門プレ公演、トークセッション）を行いました。

姉妹都市の長野県栄村の小中学校や、プロアーティストの出演もあり、地域の様々な繋がりが感じられる会になりました。



プレ公演と同時に行われた展示部門の様子。例年区内の小中学生の作品を中心に、多くの参加がある

※ 作品展示総数 318点
来場者総数 延べ 574名

創作舞台部門

「DeLeTe #君と私が■された日」

栄区を中心に、中学生以上の若者を対象として参加者を募り、応募者14名（キャスト13名、制作サポーター1名）で7か月の期間をかけて稽古、制作を行いました。1月18日（土）に迎えた本番では、3回の公演に計371名もの観客が来場しました。

主催者より

「開催にあたっての取組、および成果」

創作舞台では芝居を軸に、身体表現、群読、合唱を取り入れ、様々な表現方法により舞台を創作した。その表現を形にするために、即興表現や身体表現、歌、発声などのワークショップを行い、芝居やステージ経験のない参加者でも不安なく活動できるようにした。演劇活動を通じて、表現する楽しさ、仲間と一緒に活動する喜び、繰り返し練習する厳しさを感じつつ、芝居だけでなく多様な表現方法で公演を体験することができ、参加者が貴重な経験と感動を得ることができたと感じている。

昨年の演劇活動から引き続き参加者同士の関係継続がなされていて、今回の活動に参加できなくても、公演当日の手伝いなど、たくさんの仲間に支えられて舞台が完成されたと感じている。

今後は、若者が企画提案し、それを大人と共に具現化できるような活動としていきたい。

（「まとめとアンケート報告」より抜粋）

創作舞台のチラシ。気鋭のプロデューサー、ヤマザキミナコ氏のセンスがほとばしる

SakaeWakamonCreation 2024

新たな表現に若者たちが挑む創作舞台

■ティーンズクリエイション組織委員会主催■

ヤマザキミナコ プロデュース

創作舞台 Emotional art live

デリート

DeLeTe

#君と私が■された日

2025.1/18(Sat)

12:00- / 15:00- / 17:30-

※ 各回開場 30 分前

席料: ¥1,500

※ 3歳以上要席

会場: 神奈川県立地球市民かながわプラザ

『あーすぷらざ プラザホール』

21 合わせ・チケット販売

ストーリー

主人公はどこにでもいる女子高生。自分に自信のない彼女は、いくつもの仮面（ペルソナ）を被ることで理想の自分を演じていた。しかし、理想と現実のギャップに苦しみ、たまった鬱憤はある日言葉の刃となり、味方であるはずの人々にまで向けられていく…



ティザー動画



参加者（キャスト）の声

今回は群像劇で、それぞれに見せ場がありました。身体表現ではコンテンポラリーに丁寧に取り組んだので、個々の表現で差を創ることもできたと思います。

私は4回目の参加です。演劇が好きで参加したところ、歌も群読も付いてきたという感じで、新しい体験があって楽しかったです。ストーリーを予想するのが楽しみで、キャストへのあて書きではないと思うんですが、書き上がった台本を読みながらメンバーたちと「この登場人物が似ているんじゃない？」、なんて話をするのも楽しかったです。

当日、インフルエンザで参加できなかった子が、始めたときは遠慮がちだったのに来年またやりたいと言っていたのが嬉しかったです。常に初めての人がいるのも、新しい人と関わるいい機会になっています。

私は個性をどう捉えるか、権利をどう尊重するか…について関心があるので、いつかそういうテーマにも取り組んでみたいですね。

観客の声

（関係者より）

劇評 創作舞台「DeLeTe #君と私が■された日」

美しい映像、印象的な語りから始まり、歌唱、身体表現、群読が丁寧に配置された展開。舞台装置や小道具、音楽の演出が行き届き、衣装やメイクもミニマルに世界観を伝える。主人公達の心の動きを追体験させる演技はそれぞれ「主演」に相応しいが、それとともに周囲を固める演者が世界に奥行きを創り出す。彼らの存在が舞台に新たな視点を与え、茫洋としたペルソナを立体的に形づくっていく。

独立したよくあるエピソードがやがてひとつの事件として顕在化するとき、それまでのテキストが象徴的な意味を帯び始める。心地よい対句的な文体、エモーショナルな表現にテンポよく魅せられる中、突如として揺り動かされる強いインパクトがそこにはある。言語化の難しいこの観劇体験は、観客の胸にプロデューサーの意図以上に深く刻まれたと言ってよい。

終盤にかけて抽象の度合いを高めていく構成ながら、いささかも目を離すことはできない。私たちがともすれば匿名化し、他人事として逃げてしまうテーマに、誠実に向き合い、闘う姿勢をみるからだ。自らのペルソナを考えさせられると同時に、逆説的に到達するのは、自分自身が人間という集合体、あるいは時代性のペルソナのひとつに過ぎないという感覚でもある。若者のナーバスさ、デリケートさを、これほどダイナミックに描く作品はそうはない。

SNS上の誹謗にあふれる時代を生きざるを得ないこの時代の若者が、DeLeTeを演じている。成長することの苦しみを、全身を通して瑞々しく伝えている。観客のどこかに、演者のどこかに、何か形で見えない価値が残るのだと思う。それは「あの時代」として、いつか私たちが呼び起こす記憶を紡ぐ。社会にとって小さな出来事でも、一人の人間にとってのかけがえのない一歩であること。それが人生にとって特別な瞬間であること。プロット上でみせた成長は、現実の彼らの人生の軌跡でもある。

劇中で散えて明かされることのなかった「■」。君と私が祝福された日、と私は読みたい。

さかえ de つながる、参画のはしご

元利用者が語る フレンズでの日々と未来

フレンズ☆SAKAEの元利用者で、現在東京都にある児童養護施設に勤務する坂本 祭（まつり）さん。高校時代のティーンズクリエイションとの出会いは、同時に彼にとってはたくさんの人との出会いそのもの。やがて主体的な参画のステージへ駆け上っていくことになる若者の成長の軌跡は、居場所づくりのヒントにあふれていました。

フレンズ☆SAKAE／ティーンズクリエイションとの出会い

ーフレンズ☆SAKAEを知ったきっかけ、出会いはなぜでしたか？

高校時代、おもちゃの病院というボランティア部に入って活動をしていました。そのおもちゃの病院は、地域の子どもたちのおもちゃを直す活動で、それがこういった世界に最初に足を踏み入れたところですね。

学校全体も結構地域のイベントに積極的に参加する学校だったので、そういったボランティアをする中で自分でも何か参加できる活動がないかなと考えていた時、栄区でパン屋を営む母がチラシを持ってきてくれました。

「ティーンズクリエイション Wakamono Arts Festival（わかものなんでもぶんかさい）」。なんかこれボランティア募集してるそうだからやってみたら、と言われて、飛び込んでみたのが最初のきっかけでした。

ー最初は芸術祭との関わりだったんですね。出展者、出演者になったということでしょうか？

ちゃんと絵を描いたことはなかったので、何か出展するというよりはそれこそスポーツとしてボランティアをやりたいというような気持ちで。芸術作品の展示会場のボランティアでした。

最初は会議に参加させていただいたんですが、情けないことにめっちゃめっちゃつまらなかったんです。というのも、高校2年生の僕にできることなんて何にもなくて、自己紹介ただけで終わった記憶があります。

不安が残る中で当日を迎えて…いざ当日を迎えると、そのイベントがすごく楽しいものでした。作品を展示する作業も楽しかったですし、展示場でお客さんと話すのもすごく楽しかったですし。会議ではあまり話す機会はなかったんですが、当日になってスタッフのみんなとちゃんと話せるようになって、自分のことも知ってもらって、というのが心地よかったんですね。今年の展示は行けなかったんですが、高校2年生からは毎年行ってたんじゃないかなと思います。

当時、その場に岩堀さんもいて、フレンズ☆SAKAEのことを知り、今度行ってみようかなと思って、行き始めて…という流れです。

ティーンズクリエイションの価値

ー地元でそういう場がある、ティーンズクリエイションがある、ということについて、今はどんな感想をお持ちですか？

例えば美術部や書道部の展示が学校内で完結していたり、それぞれ作品を中々見てもらいにくいというようなことはあると思います。展示部門に関しては、いろんな部活が一緒になって、物を展示し合うっていう環境がいいですね。

実は演劇部門の方では僕も出演したことがあります。それまでは演劇に触れる機会も全然なかったので、こういう世界があるんだというのを知ったし、さらに演劇を通して、フレンズで全然話したことがない子とも話せるようにもなりました。

後から振り返ってみると、今の僕があるのも、そういえばティーンズクリエイションがあったから、フレンズ☆SAKAEがあったからかな、みたいな感じはあります。今、僕は児童養護施設で働いていますが、子どもたちに何かできないかって最初に思った場所はフレンズですし、あと地域活動を結構がんばりたいと思っているんですけど、それも高校2年生のときの最初のティーンズクリエイションのワークショップが影響していますし。

その年たまたまですけど、「祭」について考えるワークショップがあったんですよ。栄区でお祭りをすごく盛り上げている方がいらして、その方から日本の祭とはなんぞやっていうのを教えていただくワークショップで、とってもおもしろくて。

その方が結構すごい方で、外国でお神輿をやっちゃうみたいな、自分のお神輿を持って行って日本の祭の文化を知ってもらいたい活動もしていたんです。それから、自分の映画を作って映画祭をやることにしたから手伝いに来てほしいとか。その関わりから、地域で活動することがどんどん楽しくなっていくと思いますね。

当時、一緒に神社を月に一度掃除するというのを始めたんですけど、もう5年ぐらい継続しているんです。最初の方は他に2人ぐらいしかいなかったメンバーが、今はもう40とか50人くらいになっていて、さらにそこから太鼓チームができたんですよ。僕も一緒に活動していて、最近笛を始めました。太鼓と笛を合わせて神輿を担いで、を目指しています。

他の方で、国際協力についてのワークショップに参加したこともあります。日本の若い子たち、23歳ぐらいまでの子たちを海外に行かせてあげようという活動をされている方でした。その方とも仲良くなって、僕もぜひ海外に行きたいですって言ったところ、本当に行かせていただいたこともあります。

ティーンズクリエイションにはいろいろな経験、体験をいただいたと思いますね。

フレンズ☆SAKAEでの日々

ティーンズクリエイションのワークショップはフレンズ☆SAKAEで行われることが多いそうですが、そういった拠点、場があると、機会が雪だるま式に増えていくのかもしれないですね。言葉を変えると学校に通って、おうちに帰って…というだけの生活だと出会えない人に会える空間です。

仮に、坂本さんがティーンズクリエイションに出会わなかったとしたら、どんな大人になっていたと思いますか？

おそらく子ども関係の仕事には就いてないんじゃないかと思いますね。休日もゴロゴロして特に何もしていないと思います。元々高校でボランティア部に入ったのも、ティーンズクリエイションでボランティアをしてみたのも、なんか暇だったから、というのが正直なところで…。

福祉系の職業に興味はあったので、そういった仕事はしているかもしれないですけど、子どもと関わるというもう一つの軸ができたのはフレンズ☆SAKAEでの日常が大きいですね。

プレーパークで子どもたちと遊んですごく楽しかったこと、これは印象に残っています。それから、不登校を経験している子たちや、家庭が難しい状況の子たちとの会話とか。太鼓の活動が始まって、地域の子どもたちが来るようになって、休憩時間に「まつり〜、遊ぼうよ！」って言われて遊んだり。

子どもに関わる職業に就きたいと感じ始めたときに、自分にできることはなんだろう、何をしてあげられるんだろうという、自分に対する問いかけが生まれ、フレンズ☆SAKAEでの日々の中、じっくり考えることもできました。

質問に戻ると、今まで自分が気づけなかった世界や、いろんな大人、違う世代の子の視点に触れて今の自分自身になっていったんだと思いますね。

一子どもや若者の居場所は社会的に注目されていますけど、フレンズ☆SAKAEは特に世代間の交流がすごく得意ですね。

居場所について考えたとき、ただ場所があるということではなく、安心できることも一つキーワードになってきます。場として、あるいは関わり方として安心できたところはどんなところだったと思いますか？

居ていいんだよという感じが何か心で伝わってきましたよね。言葉の全てから。次も行きたくなるような機会をいただけるのも行く理由になりますし。例えばティーンズクリエイションで言えば、ちょっとだけ演劇やってみない？と誘われ、やってみようかなと。その練習が例えば夜の6時からだとしたら、そうですね、少し早めに3時から行っておしゃべりしようかなと思える。

やっぱりスタッフの方々の「愛」ですね。

「なんていうんですかね…
いい意味で『関係ない人』
なんです」

話せる関係性の秘密

一人となりは大きいですね。フレンズ☆SAKAEの環境や、生まれる人間関係というのは、何か例えられるものはありますか？例えば、居場所については「家族みたいな関係」、なんていう言葉を聞くことがありますが、家族ともまた少し違う部分があるのかなと感じています。

実は、僕は隣の区に住んでいたので、40分くらいかけて電車でいつも行っていたんです。だから学校の友達とは全然違って、フレンズはフレンズの友達、みたいな感覚でした。学校の友達でもなく、近所の友達でもなく、ちょっと嫌な言い方ですけどいい意味で「関係ない人」、と言うと伝わるでしょうか。

関係ない人って嫌な言い方になっちゃうんですけど、だからこそ学校や部活のような自分の生活の話を説明したくなりますし、他の人の話も聞きたくなる。スタッフの方々とは、ティーンズクリエイションの話もたくさんしましたね。

こう表現するのがいいのかちょっとわからないんですけど、やっぱり生活の話を聞いてくれる、保護者でも先生でもない第三者の大人がいることによって増えた選択肢があったと思うので、そういう存在だったかな、と今は思いますね。

スタッフとしての目線

一お話を伺っていると、本当に今につながっているんだなと実感します。

坂本さんは「若者」ならではの立場で、プレーパークなんかでは頼られる存在にもなっていて、ある意味スタッフとしての関わり方も経験されているように思います。子どもたちに関わるときに、ここはがんばったとか、工夫したなどということはありませんか？

同じ目線に立つことは結構意識していたんじゃないかなと思います。例えば、僕が当時大学生だったとき、僕の2個下ぐらいの高校生の女の子がいましたけど、その年代にとっての2歳は普通は大きな差ですね。でも話していて楽しい話題を選べば、もう普通に友達として話すような感じになっていきます。

当時中学生の、ちょっと不登校気味の女の子には、その子の話をなるべく聞いてあげたいなという気持ちで接していました。共感することもあるし、しなくてもただたくさん話せばいいと思っていましたね。



坂本 祭（まつり）
さん

フレンズ☆SAKAEに集った経験を持つ20代。好きなお祭りはお神輿で賑わう、栄区小菅ヶ谷の春日神社の例大祭です！

「同じ目線に立つこと。 そのことは意識していました」

相手が小学生になると結構変わってきて、もう全力で遊ぼう、と。遊んでいると、その小学生たちが「まつりくん、まつりくん」って来てくれるようになって嬉しかったですし、そういう子が友達を連れてきてその子とも遊ぶようになって、その輪がどんどん広がっていった…みたいな感じになっていた気がしますね。

フレンズ☆SAKAEでは、小学生の子なんかは時々宿題をやっています。見てあげることもあります。それが小学6年生の問題って結構難しいので僕がわからないときもある。それで小学生から勉強を覚えてもらうなんてこともありましたね。僕も本当に全然わからなかったの聞いていますけど、やっぱりそういうところが、小学生にとってはお兄ちゃんに教えてあげられたみたいな気持ちになっていたと思いますよね。

特別考えていたわけでもなく今振り返ってみるとですが、日常のところで、何か相手と同じ目線に立とうとはしていたんじゃないかなと思います。

「ちょっとだけ」、の持つ力

—もう一つ、企画について気になっています。まちにいろんな企画、いろんな機会があった方が、引っ掛かる子どもや若者が増えると思います。

どこかが全部やるとかではなく、いろんな団体さんがいろんなやり方でいろいろあるまちになったら素敵だなぁと思うんですが、その中で何かフレンズ☆SAKAEだからできた企画について、思い当たるものはありますか？

何だろう…居場所だからできること。でもやっぱり、僕にとっては演劇でしょうか。やりたくないではなくて、やったことがなかった。やったことがないからやろうと思う機会もなかった。改めて考えると、役者になるなんて自分自身でもちょっと驚いてしまいます。ただ居場所として来ていて、企画に誘われるということ、それ自体が体験ですね。

興味のなかった事柄、自分が今までやったことのなかった企画に、一步踏み出して、あれだけ取り組めたのは企画としてすごく熱かったなと思いますし、居場所の持つ力だったと思います。別に断る理由もなかったのに参加したという始まりでしたけど、あの体験を通して仲良くなった子がすごく多いです。今では一番大切にしている体験ですね。

—やったことがないからやらない、になりやすいところ、やる方に向かうのがフレンズ☆SAKAEの素敵なおところですね。

そうですね。「ちょっとだけやってみなよ」って岩堀さんよく言っていて。段々「3個だけやってみない?」、っていう風になんて変わっていくんですけど（笑）。

でもやって楽しかったことがたくさんありましたし、ちょっとだけやってみた、を自分の中でちょっとずつやってきた結果が今につながっていると思います。「ちょっとだけ」、やってみるのもいいかもしれないですね。

（聞き手 専門部会委員 岩堀 まゆみ
事務局職員 長南 悠太 ）

クロストーク

スタッフ目線 × 若者目線

最初に来たときは、誰とでも仲良くしましう、したいですっていう雰囲気あまり感じなかったの、こんなにフレンドリーに変わっていったのはちょっとわからなかったです。資質としてはきっと今のような部分があったんだと思うんですけどね。学校のように関係性が出てくると言えないことも、利害関係がないからこそ話せる、というようなパターンは、今いる子たちについても感じます。

ちょっとしたらもうどんどん変わっていった、と本人も話しているように、相手がいくつの子であろうが何でも同じところにいる、上からのものの見方をせずに非常にフラットな状態でいてくれる、そこにみんなが寄ってきていますよね。もう小学生全員から「まつりはいないのか〜！」みたいな感じの扱いなんですけど、だけど、どこかリスペクトしているところはあります。多分大人で、ちょっと年上なんだけどからかってもいいみたいな存在なんだけれども、でも間違いなく大好き、みたいな感じですよ。そんな子がどんどん増えていったのが印象的でした。

本人にも話したことがないことで、私たちがフレンズ☆SAKAEとして、坂本くんとのかかわりについて考えていたことがあります。福祉への関心がある、ゆくゆくはそういった職業に就くかもしれないという話を聞いたときに、障害であったり、



居場所は生活の場。利用者の制作物や読み継がれたマンガが日常を感じさせる。

スタッフ代表

フレンズ☆SAKAE代表 岩堀 まゆみさん

いろんな課題であったり、あるいは家庭環境であったり、そういうことに対して向き合う方向を間違わないで、表面上のことで決めつけないで、その人を見てきちんと自分の中で整理できる人間になってほしいなというのがあったんです。

福祉を担うにあたって、フラットに人を見ることは大切です。薬を飲む人は大変だからどうこうしてあげよう、とかそういうのではなく、その人の本質的なところを見て、支援を行っていく大人になってほしいなという思いがあったので、面倒くさいと思われるかもしれないこともあえて伝えるべきことは伝えることもありました。

それからそれだけ人望も厚かったの、居場所ボランティアという形で大学3年生のときからは交通費を支給する形で来てもらっていました。ゆくゆくは多分、こういった系統の仕事に就くんだろうなということで、その間にいろいろ伝えられることは伝えていった、という関わり方です。ご本人にも全く言っていないんですけどね。

本当にどこに行ってもちゃんとやっていけるまで成長して、羽ばたいてくれたのかなという気はしています。もう私の方からは、どこに行っても元気で健やかに過ごしてくれればそれでいいという、もうそれに尽きますね。

若者代表

フレンズ☆SAKAE 元利用者 坂本 祭さん

それこそ僕、あんまり人と話したくないタイプの人間だったので、フラットに見る、ということはフレンズに行ってからちゃんとわかるようになりました。

フレンズでのきっかけから友達ができたというのはすごくあったし、学校とは違う友達だからこそ、属性ではなくて相手自身の性格、人格を感じて仲良くなっていったのかなと思います。僕に対して、人をフラットに見られる視点を身につけてもらいたっていうお話でしたが、心ではしっかり感じていました。フレンズに来る他の子たちも、同じだと思います。

以前、岩堀さんは仕掛けづくりがすごい、という話をスタッフさんとしていて。中学校では不登校気味だった子が、メイクに興味があるということでメイク講座を開いたりして。その子はそのメイク技術を生かして、この前のティーンズクリエイションの舞台ではメイクさんとしても活躍しています。あともう1人、趣味とか特技とかあるのかなみたいな、あんまり表に出さないタイプの子がいたんです。フレンズでワークショップなんかに参加し始めてから、どうも演劇の才能がある、ということがわかり、もう毎年ティーンズクリエイションの演劇には出演しています。

こんな感じで、一人ひとりを見て、何か引っ掛からないかなっていうことを考えながらイベントを企画してくださっているというのは感じますよね。

僕は今、八王子に住んでいます。フレンズで感じた、地域ってすごい、地域活動ってすごく楽しいなっていう思いは引っ越してきてからも持ち続けていて、岩堀さんに倣って「仕掛けづくり」は大事にしようと思っています。なんか地域の人とつながらないかなと思って、掲示板をよく見るようになりましたよね。あと最近、河原を散歩していて、見知らぬおじいちゃんに挨拶したことがきっかけで、仲良くなって。そのおじいちゃんが蛍を守る会をやっている方で、活動に誘っていただきました。実は今日も、これから蛍を守りに行くんです。他にも、違う方に僕の名前の「祭」にちなんでお祭り参加しようよって誘われたこともあります。

地域でつながるためにはどうすればいいか、潜在的にというか、むしろ顕在的にすごく意識しながら行動ができていないんじゃないかなって最近よく思います。僕の中では仕掛けづくりとか、種まきとか、そういうものは岩堀さんから教えていただいた言葉です。すごく今、実になっているので、なんかさすがだなって思いますね。

エディタース ノート 参画の補助線



フレンズ☆SAKAEの事例でご登場いただいた、坂本祭さんが参加する春日神社の例大祭

闇バイトや悪質ホスト、ババ活・ママ活、宗教2世、いわゆるトー横キッズ…と、2020年代に社会問題化した現象は、孤独を抱える若者の「居場所」として機能する側面があったことを見逃すことはできません。以前から問題になっているネット依存等も含め、かつての青少年の健全育成の取組みとは次元の異なる対応が必要な問題として認識する必要があります。

私たちにとって、居場所とは文字通り「いる」ということのみを指すわけではありません。玉川大学教職大学院の笠原陽子教授は、望ましい環境として、

- ① 所属していると認識でき、それ以外との境界が明確であること
- ② 見守られ、心身ともに安心感を持てること
- ③ 所属集団外とも自由な交流ができること
- ④ 一定期間継続性が保持されること
- ⑤ 発達に合った「枠組み」が提供されること

があると言います。人は居場所だと感じる場所では、安心して「心を置く」ことができるのです。

闇バイトに加担し、やめたくても脅迫されてやめられない状態、悪質ホストから他者との自由な交流が絶たれた状態、など、冒頭の問題に関しては上記の何かが欠けています。これは悪意を持った主宰者が、利益のためにその場所に依存させようとするからです。彼らは不安を煽りつつ、闇バイトに加担し続ければ組織に守られ安心だ…というようなロジックを騙ることで、若者をコントロールしようとしています。

その結果、困難を抱える若者たちはより「マシ」な選択肢を自らが選んだように錯覚し、あるいは金銭／心理上の刹那的な報酬を得ることで、こういった場に一種の「居場所」を感じます。どの時代にも若者を操ろうとする悪意はありますが、現代社会におけるその狡猾さ、巧妙さには驚くべきものがあります。

こういった事件がなくなる背景に目を向ければ、家庭、学校、地域社会の変化、SNSの発達による情報の即時化、エコチェンバー（タコ壺）現象等、多くの要因を語ることはできます。

しかし、分析や評価以上に重要なことは、私たちが若者の生活の中にあるべき居場所を作り維持すること、そういった様々な居場所について知識を持つことです。

一方で気をつけるべきことは、若者への押しつけにしないということです。社会経験を積んだ私たちは、つい若者に何かを授けたいと思ってしまいがちですが、若者はそれを望んでいるのでしょうか。フレンズ☆SAKAEの取材では、いい意味で関係がない」という言葉が印象的でした。別の現場では更生を支援する施設のスタッフから、「この現場では社会参画のフェーズ以前の問題だ」という声もありました。現代社会には、家庭や学校での厳しい日常を闘い、安息を得るために別の居場所を探している若者がたくさんいます。今何よりも求められているのは、フラットな視点を持ち、この場所にいていいのだという安心を作ることができる、必要に応じ別の場所につなげる知識を持つ支援者の存在なのではないでしょうか。

神奈川県は医療福祉の施策として、未病対策を推進しています。私たちの心身の状態は、健康と病気の間で連続的に変化する「未病（ME-BYO）」の状態だと捉え、日常生活の「未病改善」により、健康な状態に近づくことを目指すものです。

すばらしい活躍をみせる様々な社会参画の事例も、全ては施設や事業への、ある日の一歩から始まります。またそれは、社会問題化する「居場所」に向かわせない、羅針盤にもなり得ます。

社会参画の前に、ちょっとした参加の機会を。その参加の前に、ただいだけいい、安心できる居場所を。若者の「未病改善」の処方箋は、みなさん「関係のない大人」こそが握っているのではないのでしょうか。

（事務局職員 長南 悠太）

「マイプロ」からはじまる、まちへの参画

#ふろぷろKananishi/

#FROM PROJECT



家庭、学校に次ぐ第3の居場所、地域。

若者の居場所と呼ばれる施設はたくさん聞くけれど、県西地域をまるごとフィールドにしてしまう、画期的な「居場所」が(一社)FROM PROJECTが運営する「ふろぷろ」です。探究学習に通じる「マイプロジェクト」、通称マイプロを通し、中高生とともに独自の活動を展開する「ふろぷろKananishi」の活動を追いました。

(上) 探究学習的なプロジェクトだが、まちに関わっていくエネルギーの強さに特長がある。写真は、全国大会推薦者による発表

(下) 一般社団法人FROM PROJECT
2次元コード



FROM PROJECT

先行き不透明なこれからの時代、身を置く環境が変化してもそれに合わせて舵を取り物事を前進させ、世の中に自らが信じる価値を生み出すことが求められます。

そのためには、自らを活かす術を深く知り事実を正しく認識し、目的を持って意思決定を行い、他者と力を合わせ、心に描いたものを実現させる力が大切です。

(一社)FROM PROJECTは、その力をもつ人を増やすと同時に、社会に「グッドインパクト」を与えることを目指しています。

(ウェブサイトより抜粋)

全国各地で展開されてきた「ふろぷろ」は、身近な地域の課題解決を目指す、中高生向けの約100日間の無償プログラムです。2022年から小田原市で、2024年度には「Kananishi (：神奈西)」として、神奈川県から委託を受け広く県西地域の高校生を募集し実施しました。

100日間の流れ

ほぼ毎週末、3時間ほどのワークショップに中高生が集い、大学生等のスタッフメンバーから「知識や思考法」を、まちの大人から「地域の魅力や課題」を学びつつ、自分がやりたいと心から思える「マイプロ」をゼロから編み出して実行します。ワークショップのほか、2回の発表の場では「アウトプットの機会」と「人との出会い」を、上記以外の日には大学生のサポートのもと「プロジェクト実行」や「再挑戦」の機会を提供するというものです。

プロジェクト自体はあくまでも参加者の主体的な活動なので、自分のプロジェクトの社会的意義や自身にとっての目的に何度も立ち返り、悩みながら場面場面での意思決定を重ねることで「自己決定力」を養います。また、チームメンバーや大人の協力者を巻き込み活動を展開することで「他者と協働して目的を達成する力」が身につきます。

最終報告会後には振り返りや学びの一般化を重点的に行い、100日間の学びを一過性のもので終わらせず今後の人生に活かせるよう、消化し切るところまで徹底して行うことが特徴です。

教育の効果

ふろぶろのプログラムは、プロジェクトベーストレーニング（PBL＝課題解決型学習）の考え方を元に、2014年、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスの鈴木寛ゼミでスタートしたものが源流ですが、クリエイティブ・ラーニング（CL＝創造による学び）を取り入れるなど、その後絶えずブラッシュアップがなされてきました。

中高生のやりたいことと、身の回りの課題を掛け合わせて「マイプロジェクト」を作っていく上で重視することは、より大きな価値（＝GOOD IMPACT）を生み出すにはどうしたら良いか様々な角度から何度も問いかけ考えさせ、一人ひとりのストレッチゾーンに合った挑戦の機会を提供すること。

代表理事の竹内薫さんは、「ふろぶろは『個益』＝自分の幸せ、『公益』＝みんなの幸せと捉え、その2つが重なり合うところにGOOD IMPACT（価値）が生まれると考えます。個益のみの自己満足でも、公益のみの自己犠牲でもない、GOOD IMPACTが生まれるプロジェクト作りを、ふろぶろはサポートしています」と語ります。

最終報告会では取り組んだプロジェクトについてプレゼンし、100日間の学びを振り返ります。そしてこの経験をどう次につなげるか、まちと自分に向き合います。

「今取り組むマイプロジェクトの成否そのものよりも、想定通りにいかないことにぶつかり最初は考えもしなかった別のやり方で乗り越えられたという体験や、自分でゼロから何かを世の中に創ったという自信を生み出したい。」

ふろぶろ卒業後、進学や就職の進路に迷った時、何か新しいことを始めたい時、難しい問題に直面した時にこそ生きてくる力を、地域というフィールドで育てたい。

だから、「プロジェクトから」はじまる、『FROM PROJECT』、なんです。」

高校生の考える課題とは…？

こうして応募の中高生とともに走り出した2024年のプロジェクト。9月16日（月・祝）に南足柄市子育て支援拠点施設「にこっと」で実施された中間報告会では、次のようなプロジェクトが動き出していました。切実な想いから壮大な夢まで話題は様々ですが、SDGsへのまなざしを感じさせる発想はやはり多い印象です。

発表では必ず身近なまちや人々の様子が語られ、そんなところを見ているのか…と目から鱗の発想も。他のメンバーやスタッフ、地域の大人との対話の中で、まちのどこで、どのようなプロジェクトを進めていくか、具体的な範囲が絞られていきます。



（左）100日間の基本的な流れ。決まったオフィスはなく、オンラインも含め様々な会場で展開していく

（右）中間報告会時点のマイプロジェクト一覧（原文ママ）。「〇〇における□□」を解決したい、を基本に考える

- 1 小田原市における、規格外野菜の廃棄が発生していることを解決したい
- 2 開成町における、競技としての野球は知っているが、野球をやることにに関して浸透していないことを解決したい
- 3 小田原市でみんなが好きなことを話して共有できる場を作りたい！
- 4 松田町における、自分の通学路が狭いことを解決したい
- 5 小田原市における、あまり食べられない人による食品ロスを減らす
- 6 小田原市における、若者が悩みなどを話し合える環境がない、あったとしても知られないことを解決したい
- 7 小田原市における、地震に対する意識が低いことを解決したい
- 8 小田原市の結婚披露宴の食べ残しによるフードロスを解決したい
- 9 山北町・南足柄市における、防災の意識を高めたい
- 10 南足柄市における、傘をさしても靴や手荷物が雨に濡れることを解決したい
- 11 箱根町における、観光スポット「スカイウォーク」の渋滞が発生していることを解決したい
- 12 小田原市における、使い終わった教科書の使い道がないことを解決したい
- 13 小田原市における、目的地に行けなくて困っている観光客を助けたい
- 14 小田原市における、通信制高校の良さを中学生、親世代などに知ってもらいたい
- 15 松田町における、文房具を簡単に入手できないことを解決したい
- 16 小田原市における、歩きスマホを解決したい
- 17 箱根町における地球温暖化解消のために、電気タクシーを走らせたい
- 18 小田原市における、なんでも話せる場所がないことを解決したい
- 19 グラウンドを人工芝に変更することで、県西地域における、サッカー部が弱いことを解決したい
- 20 アプリを使って小田原市における食品ロスを解決したい
- 21 小田原市における、エスカレーターが混雑していることを解決したい

100日間を、駆け抜けて 参加者が語る プロジェクトの体験と成長



アクション

様々な世代の人に通信制について知ってもらう取り組みを行いました

 祖父母世代	<u>メディア化</u> 神奈川新聞さん、県立青少年センターさん、河合塾さん
保護者世代	<u>親の会の運営者とお話</u>
高校生・大学生 若者世代	<u>オンラインイベント開催</u> (20代の若者8人が参加)
中学生以下	<u>「お悩み相談会」の開催</u> <u>「高校生と学びの選択肢を考える会」の企画</u>



(上) 発表資料の一部。一般の探究学習ではみられないような、多くの関係者、関係団体にコンタクトを取っていたことがわかる

今回ふろぶろKananishiに参加した飛鳥未来
きずな高等学校の3年生（取材時）、成川 愛花
さん。通信制高校のよさをアピールするマイ
プロジェクトを企画・実施した2か月後に、
現在の心境を伝えてくれました。

—最終報告会に向けて、生徒向けの相談イベント
を企画しました。どのような想いで企画されたの
でしょうか？

悩みを抱えている生徒たちを集め、悩みをシェア
できる居場所を作り、進路に悩んでいる子に学
びの選択肢の広さを伝える場を作りたいと思って
企画しました。

—タイトな期間での実施でしたが、イベント当日
はいかがでしたか？

私の担任と友達しか来なかったので、失敗だっ
たと思っています。中学生、高校生を集めるのが
難しかったです。いきなり対面での相談は緊張す
るだろうし、オンラインでも難しいと思います。

会ったことも話したこともないという状況だ
と、信頼を得られないですね。経験にはなりま
したが、思った成果が得られず、残念でした。そ
こから、どうしたら悩んでいる子に届くのか、情
報が届いてほしい人に届けるにはどうしたらよ
いか悩みました。

—10月26日の最終報告会ではその試行錯誤が支持
され、全国大会への切符を手に入れましたね。全
国大会に向けた取り組みを教えてください。

現役生だからこそ話せる高校の良さをいろんな
世代の人に伝えたいという想いから、「通信制高校
の良さととは？」をテーマに、大学生や社会人に伝
えるイベントを企画し、オンラインで開催しまし
た。地域でフリースクールを広めている人に呼び
かけてもいただきました。

また、小田原市内の中学校の進路説明会で説明
をしたいと思い、各中学校に掛け合いました。時
間がなかったこともあり、1校も実現できません
でしたが、好意的な反応の学校もあったので、2
月末に話せるかもしれません。

—イベントを企画してみて自分が変わったと思う
ことはありますか？

活動を通して、まだ今は後ろ向きな理由で通信
制を選ぶ人が多いという現実と向き合いました。
一方で、「この子たちには通信制を選択してほしい」
と思える人たちを見つけることもできまし
た。

変わったという点では、初めは、電話も怖かつ
たですが、中学校に電話をかけ続けて怖くなくな
りました。実際にいろいろと行動に移せるようにな
ったのは、自分が強くなったからだと思いま
す。また、初対面の人に対しても、自分から過去

教えてもらったタスクは一日一つどころではなく、毎日いくつも！

10/25(金)	☐	発表練習完成
10/20(日)	☐	スライド完成
10/14(月)	☐	イベント開催(お悩み相談会)
10/12(土)	☐	バザール開催
10/10(木)	☐	カウンセラーに良い話の聞き方を教わる
10/9(水)	☐	ふるぶろアカウントのインスタで告知
10/4(金)	☐	UMECCOと図書館にチラシを直接届けに行く
10/4(金)	☐	近い中高にポストにチラシを投函する
10/4(金)	☐	近い中高にチラシを直接届けに行く
10/3(木)	☐	チラシ印刷
10/2(水)	☒	チラシ完成
10/2(水)	☐	自分の高校のインスタに告知してもらう
10/2(水)	☐	切手購入
10/2(水)	☐	封筒購入
10/2(水)	☒	小田原市内全中高にチラシ配れるか電話
10/2(水)	☐	イベント開催場所のアポ取り
10/2(水)	☐	チラシを送る先(中高)のリスト化
10/1(火)	☒	電話で聞く内容を考える
10/1(火)	☒	アンケートフォーム作り
10/1(火)	☒	どうお悩み相談会を進めていくか決める
9/30(月)	☒	中間報告会
9/18(月)	☐	イベント内容を決める
	☒	歩いてポスター置せるところを決める

「いろんな人と関わってこそ、 まちに愛着が生まれると思います」

成川 愛花さん

ふるぶろKananishi参加者。
高校の先輩に教えてもらったことを
きっかけに参加したところ、なんと
想像以上に大変で、しかも想像以上
に楽しかったのだとか。



の話ができるようになってきたことも大きな変化
だと思います。

—全国大会は一泊二日で行われたそうですね。全
国大会はどんな感じでしたか？

おもしろい場でした。夜中までスライド作成を
しました。全国大会ではレッドカーペットでの入
場から自分で考えるんです。とてもよい経験にな
りました。

—今後はどのように活動されますか？

まずは大学受験が目前に待っているので、そ
こをがんばりたいです。

不登校の子だけではなく、いろんな人に通信制
の良さを知ってほしいという気持ちは変わってい
ません。不安を感じている在校生に、通信制の魅
力を最大限活用することで楽しい学校生活を送れ
ると知ってほしいし、不登校の子どもや保護者に
対しても、通信制という学びの選択肢の魅力を伝
えていきたいです。

不登校の子の親の会の方とできたつながりか
ら、受験後には支援機関の方たちと一緒に活動し
ていく予定です。一人だと難しいので、大人と関
わってやっていきたいと思っています。現役で通
信制に通っている生徒がいて、自身がゲストと
なるイベントもやってみたいです。

今、成果は出ていないけれど、続けることでい
つか想いは届くと思っています。これから先、活
動を続ける中で、自己実現のサポートをしていけ
るようになりたいです。

—改めて振り返っていかがでしたか？

このプロジェクトに参加した当初、課題解決し
たいことは何かと問われた時、通信制を広めたい
と思いました。

それが自分自身の過去を振り返る機会になり、
その中で、やりたいことがはっきりしていきまし
た。今回の活動は課外活動の場というより、教育
の場に参加したという気持ちが強いんです。

今後は、大学に行きつつ、生活費も稼がなけれ
ばいけないので、後輩のサポートまではできな
いかもしれませんが、たまに参加できるものだ
たら、参加したいです。

ふるぶろで生まれたいろんな人との関わりの方
で、私のプロジェクトも時間はかかるかもしれま
せんが、届けたい人に届けられることができると思
います。

—ふるぶろは、教育というよりまちづくりと代表
理事の竹内さんがおっしゃっていました。このプ
ロジェクトには、若いうちから地元を好きになっ
てほしいという気持ちがあるそうです。

小田原や県西地域への想いはいかがですか？

実は私、住んでいるのは熱海なんですけど、東京
から引っ越してきたこともあって地元という感覚
がありません。小田原、県西地域のみんな
のプロジェクトを近くで見ながら、地元愛が生
まれたというか、よい学校を選んだなと思います。
将来も、小田原に知り合いが多くいれば戻って
くるきっかけにもなると思います。

ふるぶろには地元企業の社長の方も来ていたの
で、地元の人も優しい人なんだ、いろんな魅力が
あったんだと認識する機会にもなりました。やっ
ぱり、いろんな人と関わってこそ、まちに愛着が
生まれると思います。

ふるぶろの活動は、県西地域全体を居場所とし
ていると感じています。

中間発表で成川さんと初めて会った時、通信
制高校を広めたいという並々ならない情熱を感じ
ました。しかし、活動途中での相談会の失敗
や、通信制高校へのステレオタイプの目線に
触れ、悩んだ時期もあったそうです。

そうした経験からどうしたら人々に届くのか
を真剣に考え、行動に移した結果、成川さんの
言葉はより重みを持ち、一回りも二回りも強く
なったように感じました。人前に立つのは今で
も緊張すると笑顔で語る、成川さんの成長が楽
しみです。

(聞き手 専門部会委員 益田 麻衣子)

ふろぶろのこと、まちのこと

竹内 堇さんと考える 若者の未来

今回、昨年度までの「ふろぶろ小田原」から県西地区全域に拡大して実施した「ふろぶろKananishi」。若者の社会参画のヒントを探して、「ふろぶろ」のこれまでと仕組みについて、代表理事の竹内 堇さんにインタビューしました。



Sumire Takeuchi

竹内 堇（すみれ）さん

（一社）FROM PROJECT代表理事。グアムの高校を卒業後、秋田県の国際教養大学に進学し在学中の2020年に一般社団法人FROM PROJECTを設立。主に、中高生の主体的なまちづくり参画を促すための100日間のオリジナルプログラム「ふろぶろ」の開発や提供を行っており、これまでに全国28地域から計3,000人以上が卒業した。

約3年半前に小田原市へ移住後、多くの魅力的な地域人との出会いをきっかけに、神奈川県では初めてのふろぶろである「ふろぶろ小田原」を2年連続で実施。

2024年度は神奈川県から受託した事業、「ふろぶろKananishi」（Kananishi＝神奈西）として神奈川県西地域2市8町の高校生らにプログラムを提供した。また、法人外でも、多面的にまちづくりや人材育成分野に関わり、自らの背景や行動をもとに「自分の人生を自分で創る」ことを全国の学生に伝えている。



ふろぶろKananishi の目的
地域への愛着を深めること
地域を狙う者の育成
私と地域を好きになること

（参考）ふろぶろが大切にしている7つの心、「The 7 Hearts」

1: The 7 Hearts ふろぶろ7つの心



今この瞬間に100%

本気でやるのと、なんとなくやるのは雲泥の差で、同じ時間を過ごしても、向き合う姿勢次第で全く違うものになる。だから今に集中して「今」の価値を最大化しよう。



行動至上主義で行こう

行動の伴わないプロジェクトは存在せず、どんなに良いアイデアを思いついても頭の中にあるだけでは、誰にも何の価値も生み出していない。圧倒的行動量の人には圧倒的な経験と学びを得る。



すべてを糧にする

プロジェクトを進めていくと、「100%思い通りで大成功」とは大抵ならない。成功や失敗というラベルに惑わされず、丁寧に振り返り、自分の中で次に繋がるように意味付けをしよう。



半学半教の姿勢で向き合う

ふろぶろには先生がいない。生徒もいない。みんな自分の人生しか生きたことがないから、しかもみんな絶対に違う人生を生きているから、必ず全員に教えられることがあり、学べることもある。



未来は自分で創る

人は変化するし、社会も変化するし、ふろぶろも変化する。全てはその変容の途中で、完成も確定もない。ワークショップの内容が、誰かひとりの意見で変わることもあるし、それができそうな柔軟で強いチームで在ろう。



わくわくに任せる

VUCAの時代と言われる現代社会で、「正解」なんて大抵存在しないから、やってみなきゃわからない。何ができそうか、褒められるか、よりも、何がしたいか。自分の中のわくわくを大事に意思決定をしよう。



愛を持って人と協働する

愛を持って協働するとは、相手の意見を優先して自分の意見を抑えるのではなく、相手の意見も自分の意見も大切にしたい上で、愛のある伝え方で話し、愛を持って話を聴くということ。

10月26日(土)に小田原お堀端コンベンションホールで行われた最終報告会の日は、それぞれがそれぞれに緊張しながら全力を尽くしました。当日、印象に残った「マイプロジェクト」について、竹内さんは顔をほころばせながら次のように語ります。



「もちろん、それぞれ印象に残る点はあったんですけど、ふろぶろが大事にしているThe 7 Heartsの中の1つ『未来は自分で作る』をまさに体現していた『早雲様レモン洗浄計画』というプロジェクトが印象に残っています。

プログラム初期～中間発表会の頃は電気タクシーに北条早雲像をラッピングするプロジェクトを考えていたんですが、その後企画していたプロジェクトはすでに実施されていることが発覚したんですね。そのため、新たにこのプロジェクトを立ち上げるに至りました。だから、やや遅れてのスタートダッシュとなりました。

そんな中でも、彼は早雲像を磨くために、小田原市観光協会、市役所の各課、上下水道局など多岐に渡る関係各所に電話をしたり、作成した企画書を提出したりするなど、自主的に交渉を進めていました。並行して、飲食店で廃棄されるレモンの皮を集め続け、最終的に彼の手元には約300個のレモンの皮が集まったんだそうです(笑)

ただ、残念なことに、最終報告会までに早雲像を磨く許可を得ることはできませんでした。

次に早雲さんが描かれたマンホールの縁の洗浄を提案してみたのですが、こちらも許可が下りず…。それでも、彼は諦めませんでしたね。早雲像を洗浄するという夢のためにも、そして集めたレモン300個を無駄にしないためにも、まずはどこかやらせてほしいと。最後は、私がつないだ小田原城の館長の元へ、自分で突撃して直談判していました(笑)。それで、なんとか小田原城の案内板を磨く許可をいただき、最終報告会当日の“朝”、リハーサル開始直前に磨き上げたんです。」

3か月の短期間に、企画書を4つ、チラシも3種類作るという紆余曲折を経た彼は、なんとこの100日間のことを計62枚ものスライドで発表したそうです。

「彼は本当に最後の最後まで『まだ希望はある』と言い続け、100日間を走り切りました。結果的に全然違うプロジェクトに変わったわけなんですけど、実は根底は同じで、SDGsへの強い興味関心、北条早雲に対する愛情が原動力になっているんです。あの時の彼の“熱量”と、心から楽しそうにプレゼンテーションをする姿はとても印象的でした。」

「FROM」 PROJECT

ふろぶろというプログラムは区切りこそついたものの、多くの場合、この期間の1度だけの企画・実行だけでは、大きな夢は実現しないもの。

「Good Impact Challenge」という全国大会に選出される参加者には、その後数か月間のサポートがつきますが、彼らの壮大な目標は道半ばです。竹内さんは、そんな状況を理解しつつ、あえてその先は彼らに任せるスタンスだと言います。

「ふろぶろは100日間で『企画の立ち上げ～検証、振り返り』を前提としたプログラムです。ですが、この100日間で全員に成功体験を積んでもらうことが目的ではないんです。この期間で成功も失敗もたくさん経験し、とにかく場数を踏むということを大事にしたいんです。人生で初めて企画書やチラシを作った、人生で初めて直接電話をした——そういう多くの初体験を伴走し、失敗を恐れすぎずに挑戦できるマインドを育てていく、そのための100日間なんですね。

プロジェクト後にさらに活躍する参加者には、文字通り「100日間で全力でやりきった」という共通点があるのだとか。本当に泣きながらがんばっていたような参加者は、80年の人生に影響するだけの100日間として消化することができ、さらにその先に伸びていくそうです。

大きな成果があった、地域や社会の課題を解決したとまでは言えないプロジェクトであっても、最終報告会で話せることの量と意思の強さは声や表情、姿勢から確実に伝わるもの。そういう参加者がさらに伸びていき、近い未来、社会に影響を与える1人になる実感があると言います。



挫折体験と「失敗力」

失敗を恐れず挑戦し、実体験を学びに昇華させる力——ふろふろがそう定義し、大切にしているという「失敗力」。失敗を単なる「失敗」と捉えない「挑戦の味をしめた状態」は、失敗や挫折から立ち上がる経験なくして得ることはできません。

「実はこのプログラム、必ずどこかで挫折を経験するものなんですよ、ちょっとかわいそうなんですけど(笑)。ふろふろを卒業する以上、「なんとなく」、「とりあえず適当に」ということはできません。結局は最後に気づく時が来ます。

例えば、参加者のやる気がなかなか着火しないとき、スタッフからフォローに入っても本人からの返答が滞ることもあります。差し伸べられた手や声かけなどのチャンス全てを掴まない選択をした場合に、最終報告会をななめの状態で迎えるケースが稀にあります。でもその子たちって、やっぱり最終報告会のステージで自分で気づくんですよね、みんなとの熱量の差や、自分が語れることの少なさに。

ふろふろの100日間は挑戦の繰り返しです。挑戦には結果が伴い、期待した結果を得られないこと（失敗）も何度も経験します。自分のプロジェクト実施上の失敗であったり、プレゼンテーションや人との関わりの中での失敗であったり…人生で初めての体験だらけの中で大量の挑戦経験と失敗経験を積み、そしてワークショップ内で毎週振り返りも行います。そして、失敗に対する心の耐性と、失敗から得られるものの大きさを体感していきます。そうすると、挑戦の味をしめて、さらに新たな挑戦をするようになり…これがまさに、失敗力のある人が育まれるということですね。

ふろふろの卒業生には、大学生になった際に当時やってもらったように参加者の伴走がしたいとスタッフ側に回るケースもあります。スタッフになる彼らは、自分自身がものすごく変わったという実感を持ち、その変化が生まれる瞬間を作りたい、見たい、そういう想いで取り組んでいるのだそうです。

「大学生スタッフのすばらしさというのは、参加者に対してがんばっている姿勢を見せたり、間違えたりできることですかね、わかりやすく。

例えば学校の先生がミスをする姿をたくさん見せることって、難しいと思うんですよね。あ、間違えた、あれ忘れた、これやってない、みたいな訳には中々いかない。でも大学生スタッフは分かりやすく「学生」という学ぶ立場でもあるからこそ、見せられる背中があると思うんです。

間違えた時にどう修正しよう、ミスをした時にどうやって謝罪しようとか、そういう姿をより近くで生で見てくれるのが、彼らなんですよ。たくさんミスができちゃう、挑戦や失敗と一緒に重ねて共に変化していく姿を間近で見せられる、そんな大学生スタッフは、ふろふろを形作る上で欠かせない存在だと思います。

教育へのまなざし

ふろふろの活動は、学校教育界でも一つのムーブメントになっている探究型の学習、まさにそのものと言えます。先進的な教育学的理論に基づくプログラムを開発しつつも、あえて学校という枠外で展開する竹内さんは、民間だからこそできることがあると意気込んでいます。

「実は学校と共同でやっていた時期もあります。高校の先生に実際にワークショップを見てもらい、何度かコラボ等のオファーをいただいて関わっていた事例があるんですよね。

ですが、どうしても学校という枠組みには制限があるものです。本当にやりたいことがそのままできるというのが一番なんですけど、それが学校というフィールドになった途端、一筋縄では行かないことが多いです。

やりたいことを実現しやすいのは、やはり何にも縛られず自分でやることなので、そういう意味では完全に民間という立場になってやっていく方が、私たちの専門性をより活かすことができますし、ふろふろが目指すことをより忠実に実現できます。



ふろふろには大学入試の総合型選抜や学校推薦型選抜(注：旧AO選抜)のためにという参加者も一定数来ていますが、ただ入口は何でもいいと思っています。もちろんビュアな課題意識から参加してくれるのは嬉しいですが、正直なところ、結局プログラムを進めていく中で、入試のために計算してやってるんだ、とかはもう言っていられない状況になるんです(笑)。

目の前の人にどう対応しようとか、今やっちゃったミスどうしようとか、企画してはみたものの参加者が集まらなくて、どうやって実行しよう、とか。そういう瞬間がたくさん出てくるのが実際にプロジェクトをやるということなので、入口は何でもいいかなって思っています。

各々がいろいろな理由で入ってきて、そこに例え入試のためという層が一定数いたとしても、出口の時には忘れかけている。そのくらい夢中になれてこそ、入試を含め人生にとって大きな糧となる時間になると思うんです。」



(左、中) 北条早雲、小田原城と、その地域ならではの環境が探究のフィールドになる。図らずも、文化を次代に繋ぐ働きも
(右) 銅像を磨くために集めたレモンの皮

ふろふろの考える場づくり、関係づくり

多くの現場の課題である、スタッフの声の掛け方やスタンス。参加者の中高生と大学生年代のスタッフがお互いに学び合う営みを大事にしているふろふろの現場に、何かヒントが隠されているかもしれません。そこには、ハード・ソフト両面から、場を作るアイディアがありました。

「ハード面では、照明を結構重視しています。何かを考える時間は真っ暗にして電気の蠟燭を使ってみたり、とか。ふろふろは常に決まった会場でやっているわけではないですが、こういうことはどの会場でも取り組みやすいですね。ふろふろらしきみたいなものは実は一定あるので、そういう工夫はあると思います。他にも、椅子や机はできるなら撤廃したいので、できることならお座敷でやろうというのを前提にしています。お座敷で靴を脱いで人が動きやすくなると、障害物も少なくなつて人が流動的になりますから。あと、備品に大きなレジャーシートが2つあるんですよ。持ち運び用の取っ手もあり、20人くらいが座れるので、お座敷の会場が借りられない時にはそれを敷いて実施することもあります。

ソフト面で言うと、100日間の序盤はスタッフ側が意見を言い過ぎないことを大切にしています。参加者にはまだふろふろでの文化やマインドが醸成されていないので、その段階でいろんなことを言うと、『周りの人の言うことは最大限聞かなきゃ』と思っているためか、色々振り回されてしまつて自分の考えが分からなくなってしまう。

全部を全部聞き入れる必要はないと思うんです。10人に意見聞いたらみんな全然違うことを言うのなんて当たり前なんですし。でも、それを知らない参加者は「なるべく聞かなきゃ!」、「その通りに変えなくちゃ!」という姿勢がすごく強いので、最初の段階ではスタッフの意見を前面に出すコミュニケーションは控えるように言っています。

ただ最終的には、参加者もスタッフも言いたいことを言い合える状態が理想的だと思います。言わないようにする、言い過ぎないのがよい、というような関わり方については、本来何かを言うことが問題ではなくて、受け取る側がどう受け取るかという問題だと思います。

参加者それぞれが『人の意見には感謝して耳を傾けるけれど、全てを取り込むのではなく、何をどう取り込むかは自分で取捨選択する』という、私たちがふろふろマインドと呼ぶ姿勢が育まれるような環境づくりこそやるべきことかなと思いますね。」

(聞き手 専門部会委員 益田 麻衣子
事務局職員 長南 悠太)

レビュー_2024

行政と手を携えて

「県西センターさんと
生み出したい価値が重なっているので、
事業全体を通して納得感があります」
(竹内さん)

民間の立場から行政と協働するふろぶろの事業。国内の様々な地域での事例を知る竹内さんに、行政との関わりについて感想を伺いました。



県西地域県政総合センターの最終報告会告知チラシ
作成：(一社) FROM PROJECT

—今回、県西地域県政総合センターの委託事業となったわけですが、行政と関わる地域の側の方々は一種の難しさを感じる場面もあると聞くことがあります。というのは、一般的に地域が活性化しました、高校生がいきいきやっています、みたいな行政から期待されるゴールがありますよね。そういった行政の思いと、若者たちが本当にそう思っているのか、というところでギャップがあるという悩みを寄せられることが多いんです。お互いに本当は違うところを見ているのに、一つのプロジェクトでやるっていうのは結構大変なのかなっていうふうに想像して。

異なる主体がコラボレーションをしている以上、もちろん難しさはありますが、県西地域県政総合センターさんと私たちは、見ている方向が近いと思っています。ですので、見ているところが違うという点についての大変さはあまり感じませんでしたね。

お互いにこだわりなどがありますが、大枠として目指しているもの、生み出したい価値みたいなものは、言葉は違えど同じなんですよ。

実は、私が4年前に引き継いで今の会社を立ち上げたタイミングから、元々もっと教育色の強かったプログラムの土台に、まちづくりの要素を強化しているんです。まちづくりにとっても地域の若者の参画は重要事項で、学生たちにとっても身近にある実践的な学びのフィールドとして、地域と教育とは、すごく相乗効果の高い組み合わせだと考えています。

自己肯定感の醸成に関する文脈や、ふろぶろの重視する自己と他者への両方の視点などを汲んで、キャッチコピーに「地域と私を好きになる100日間」をご提案いただいたんです。一緒に事を進めるにあたって柔軟に、根気強く対応していただき、色々な相談にも乗ってくださったおかげで、結果的に今出来上がっている。変に無理しているとか、実際やっているものと違うとかという感覚はなく、事業全体を通しての納得感がとてもあります！

—それが行政との相乗効果になっている、というのはすごくいいですね。そこがうまくいかない例もあると聞きますが、ヒントはどこにあるとお感じですか？

県西地域という、全県でもないし市町でもない、というところがすり合わせやすかった印象があります。教育、商店街、のように行政的にはそれぞれご担当がいいらっしゃると思いますが、縦割りを乗り越えて柔軟に対応していただけたと感じています。

それと、やはり人ですかね。行政側にキーパーソンが現れるか、ということも非常に大きいと思います。行政と言っても多様な職員の方々がいらっしゃる中で、今回、県西地域ぐるみで活動ができればまちがよりよくなるから、と熱心に動いてくださった職員の方がいらっしゃるって、この企画が実現できました。

(聞き手 事務局職員 長南 悠太)

エディターズ ノート 探究学習のレイヤー



ふろぶろKananishiの活動中の、成川愛花さんの一コマ。大人の本気の姿勢が学びを深める

近年、まちを舞台にした探究的な活動は、NPO等が行政から委託されるという形で様々な地域で展開されており、子ども・若者の声を施策に反映することを謳う「子ども目線会議」の推進とも軌を一にする形で注目が高まっています。

ここで改めて私たちが探究的な活動について考えるとき、やはり押さえておきたいのは学校で行われる「総合的な探究の時間」についてです。

これまでの総合的な学習の時間が深化する形で2022年より高校でも本格的にスタートしたこの科目は、「変化の激しい社会に対応して、探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成すること」を目標にしています。

その進め方は、探究の過程で必要な知識及び技能を身につけ、実社会や実生活と自己との関わりから自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析し、まとめ・表現するというものです。このことを通じて、学びに向かう力、人間性といった資質の獲得も目指します。

これをFROM PROJECTの展開する「ふろぶろ」と比較したとき、「総合的な探究の時間」が目指すものそのものであることに気づきます。

一方で「ふろぶろ」の活動には、多くの学校とは異なるいくつかの要素があることもまた、浮かび上がってくるのではないのでしょうか。

1つは参加者の主体性の問題です。文部科学省の「今、求められる力を高める 総合的な探究の時間の展開」（令和5年3月）には、教育課程については、「生徒や学校、地域の実態を踏まえて（中略）指導計画を作成し、計画的・組織的な指導に努めるとともに、目標及び内容、具体的な学習活動や指導方法、学校全体の指導体制、評価の在り方、学年間・学校段階間の連携等について、学校として自己点検・自己評価を行うことが大切である」とされています。

授業時数の中で、学校に通う多くの若者が教科横断的にまちや社会を考える機会が生まれたことは画期的ではありますが、カリキュラムを学校が定める以上、一定程度は大人が若者に授けるものとなり、実際の活動はいわゆる「操り参画」に止まるケースも散見されます。また、進路選択に関わる「評価」を受ける点で、若者のマインドセットも受動的なものになりかねません。

もう1つは伴走する支援者の存在です。活動を大枠でコーディネートする存在はNPO等にもいますし、学校では教員が担います。違う点は、多くのNPO等で参加者のメンターとして少し年上の若者のスタッフ、あるいは地域の人材がつく事例が多いことです。取材を進める中で、この存在が活動のキーパーソンになることがわかってきました。

例えばふろぶろの場合、探究学習のゴール、「まとめる」というアウトプット部分だけではなく、地域で試行錯誤するプロセスの中で常に若者の学びが最大化する仕組みがあります。多くの地域で参考にしたい事例です。

一見似たものにも見える探究活動にも、実際には進める側の得意・不得意や目的の違いがあります。これらのことを、学校外の立場にいる関係者が理解しておくこと、自身の活動の強みを考えることが重要なのではないのでしょうか。

どの学校が、どの団体が、誰が優れている、という視点から離れ、若者がまちに関わり得る様々な機会を用意できることが地域の強さであり、資源です。探究のネットワークが増え、レイヤーが何層にも重なり合うとき、若者はどこかでまちと出会い、まちに向き合い、結果として地域は必ず活性化します。

どの活動に参加する若者も、たった1回の青春の時間を使って探究活動に取り組んでいます。その活動の支援に今まさに取り組んでいる、取り組もうとしている、そんなみなさんの活動に期待を寄せずにはられません。

（事務局職員 長南 悠太）



「体験」の力

体験格差という言葉が話題になるなど、かつてなく子ども・若者の「体験」の価値に注目が高まっています。何らかの効果を目的として行う体験を「体験活動」と呼びますが、専門的には生活・文化体験活動、自然体験活動、社会体験活動の大きく3つに分類されるものです。

生活・文化体験活動は例えば放課後に行われる遊びやお手伝い、野遊び、スポーツ、部活動、地域や学校で行われる行事などを指します。自然体験活動は、例えば登山やキャンプ、ハイキング等といった野外活動、星空観察や動植物観察といった自然・環境に関わる学習活動です。社会体験活動には、ボランティア活動や職場体験活動、インターンシップ等が挙げられます。若い時期のこういった活動を通して、私たちは社会を生き抜く力の基礎的な能力を育てていることが明らかになっています。

また、体験活動は自分自身との対話、実社会との関わりを考えるきっかけにもなります。例えば、ボランティアとしてまちを清掃し、地域の課題を考えること。自然の中で、これまで触れたことのないものに触れ、五感で感じ、その存在を認めること。コロナ禍をきっかけに「疑似体験」や「間接体験」ができる環境が急速に整備されましたが、本来の体験活動は地域の人々や自然環境と密接に関わる中で、自ら生き抜く力を育む活動です。

神奈川大学「体験型研修」

とはいえ体験は、一般には分野やプログラムごとに独立して理解されており、体験という枠組みに対して「何かやってみよう」と気軽にアクセスする若者は多くはありません。

「直接体験」の持つ力を学生に提供したい。なるべく多くの学生に届く仕組みを作りたい。神奈川大学がそんな思いで2020年に立ち上げた共通教養科目「体験型研修」は、体験をキーワードに様々な科目を関連付け、一つのプログラムとして整理しており、わくわくする魅力にあふれています。

さらにそのプログラムを別の角度から見つめたとき、神奈川県豊かな教育資源を生かしたまちとの出会い、そして参画の扉にもなっていました。



(上) 小田原市内の農園で、玉ねぎをはじめとする野菜の収穫に取り組む大学生たち。
(中) 収穫した野菜を「いただきます」。特にトマトが絶品だったそう
(左下) 鹿や猪といったジビエについて学び、食べさせていただく
(右下) 羽釜で炊く県産米「はるみ」

「体験型研修」プログラム一覧（ウェブサイトより）



ケーキ屋・パン屋になろう	横浜まち歩き	食育わくわく体験
法的交渉入門プログラム	ひらめき鑑賞学	みどりの鎌倉
基礎から始めるゴルフ	はじめてゴルフ	マリンスポーツの多目的実践
鎌倉で体感！ウインドサーフィンの魅力	基礎から始めるスノースポーツ	五感で味わう北海道の「Japow」
野外での自然観察	横浜内港でのシーカヤック実習	囲碁

※上記の科目は2024年度開講プログラムです。（年度によって変更の可能性あり）

まだ知らない、 「神奈川」と出会う

「体験型研修」は、生活・文化体験活動、自然体験活動、社会体験活動を組み合わせて構成していますが、それぞれのプログラムの中で地域の人材と関わる場面を意識的に設定していることも特徴です。学生、もとい若者がまちづくりの最初のきっかけに出会う「参加」の場として機能する面にも注目しておきたいところです。

みどりの鎌倉

「授業の目的」より：

人々が暮らす身近な地域の環境や風景の保全って、いったい何をしたらいいのだろう？
鎌倉を舞台として、現地を歩き、観察し、そしてボランティア活動で汗を流しながら、その答えを一緒に考えてみよう！という体験型の授業です。

「実習場所」：

【神奈川県鎌倉市】

公益財団法人鎌倉風致保存会のお世話になります。

横浜内港でのシーカヤック実習

「授業内容」より：

神奈川大学と公益財団法人帆船日本丸記念財団・NPO法人横浜シーフレンズの連携事業として実施され、シーカヤックを通じて海とふれあい・感じ・学ぶ、有意義な体験授業であり、受講生が学外の社会人との接点を有効に活用する場を提供する授業でもあります。

囲碁

「授業の目的」より：

囲碁を通し論理的思考力(ロジカルシンキング)の向上を目的とし、ルールを習得して、最終的に19路盤で対局できるようにする。
囲碁の歴史や、平塚市の文化振興の一助として囲碁が深くかかわっていることについて知ることで、神奈川県で学ぶ知識人としての教養を身につける。

プログラム例

プログラムの一部、「食育わくわく体験」(実施要項より)。実施にあたって、地域コーディネーターが間に入って調整することで、体験の充実度を高め、学ぶ価値を底上げしています。
プログラムは全てウェブサイト上で公開されています。



集中・時間外科目(横浜キャンパス・みなとみらいキャンパス開講科目)

食育わくわく体験

～おいしい小田原を食す～

前期



主担当教員:中川 理絵 副担当教員:齊藤 ゆか/磯田 浩司

時間割コード:11FL010

開講科目名:体験型研修/ー【食育わくわく体験】



おすすめポイント

小田原は知る人ぞ知る古くからのたまねぎの産地です。
たまねぎ収穫だけでなく、かながわブランド農産物に指定されている「小田原梅」の収穫も行います。
地域に根付いた体験を行いながら、分野・専門にとらわれない広い視野や考え方を一緒に学びましょう!

授業の目的

文系、理系問わずさまざまな専門分野の視点で「食・農業」をテーマに学びます。
専門の異なる教員がそれぞれの専門分野の視点から講義を行うため、多様な視点を身につけることができます。新たな学問への興味・関心のキッカケ、なりたい自分像のキッカケ、地域問題発見のキッカケなどたくさんのキッカケが詰まっているおトクな体験型授業です。

授業内容

全回対面で行います(大学で行う場合は土曜日2限)。
第2回から第12回は小田原市で農業・ワークキャンプ実習(合計3回)をします。
各実習後に振り返りのレポートを提出してもらいます。
第14回は学んだことを各自発表してもらいます。

日程

実習は土曜日または日曜日(5月と6月に計3日)

実習場所

神奈川県小田原市

持ち物・費用(予定)

【持ち物】

軍手、タオル、飲み物等
*動きやすい服装(汚れてもよい服装)で!!

【費用】

自宅から現地までの交通費。各自の昼食代。
学研災付帯賠償責任保険 340円



学生の声(2023年度)

ではやってみてどうだったのか、が気になるところ。
参加した学生の様々な声が公開されていますので、ぜひご確認ください。

「パネル展☆食育わくわく体験～食で
つながる小田原と横浜の学生～Part I」

「体験型研修～小田原で甘夏ミカン収穫と
農機具体験～/お知らせ | 神奈川大学」



地域で育った若者は、やがて地域で活躍する志を立て、人づくり、つながりづくり、地域づくりの道を歩みます。生涯学習、社会教育の専門職を育てる大学の社会教育課程は、そんな彼らが集まる場所。教育課程と自由な時間の間だからこそ成り立つ、この取組みが今、おもしろいのです。

神奈川大学社会教育課程の有志が運営する「かながわユースフォーラム実行委員会」では、新しい人、新しいこととの出会いを大切にしながら半年にわたり地域社会の課題解決を目指します。様々な学部へ属し、多くの県外出身者も含む学生が、はじめて「ひとづくり」、「まちづくり」に挑戦する緊張感。年に一度の実践報告「かながわユースフォーラム」では、多様な「かながわ」に触れた瑞々しい経験を伝えていました。



活動事例

かながわユースフォーラム2024

半年にわたるプログラムと、実践報告を生き生きと伝える報告書。若者と地域、まちづくりのコラボレーションの例が豊富に記載されています。ファイル全体のダウンロードも可能です。アイデアを探している読者のみなさん、必読です！

[note「【かながわユースフォーラム2024】報告書が完成しました！」](#)



かながわユースフォーラム実行委員会

上記について、それぞれの日ごとの活動報告が詳細に紹介されています。実習やふりかえりの中で、地域がどう関わり学生が何を感じたのか。若者の心の動きが伝わり、解像度が高まる記事は、コーディネーターとしての視野を広げてくれますよ。

[note「ユースの活動報告」](#)



社会教育課程のその後

社会教育課程修了者は、人を育てる専門職とされる「社会教育士（称号）※1」と「社会教育主事（任用資格）※2」を得ることができます。特に社会教育士は、2025年現在地域社会を支える新たな資格として人気が高まっており、多くの人材による様々なフィールドでの活躍が期待されています。

※1 社会教育士

2020年より、社会教育課程修了者が学習成果を広く社会に生かせるよう、新たに「社会教育士」と称することができるようになりました。市民の学びと活動を応援する専門職として期待されており、例えば、学校と地域の連携やコーディネート、子どもから高齢者、外国人、障がい者など多様な人や組織の活動の支援を行います。主な活動拠点として、公民館、図書館、博物館、青少年・女性教育施設、生涯学習センター、コミュニティセンター、スポーツ・文化施設等が想定されています。

※2 社会教育主事

都道府県や市町村の教育委員会におかれる、生涯学習・社会教育の「専門的教育職員」です。主に、市民の学習ニーズの把握、社会教育計画の立案と事業の運営、社会教育関係者に対する指導・助言、学校の求めに応じた助言を行います。

関係機関 リンク集

[「神奈川大学社会教育課程」](#)



[「社会教育士について」
文部科学省」](#)



[「文部科学省」
社会教育士note」](#)



[「神奈川
社会教育士会」](#)



エディタース ノート 「神奈川」への雑感



それぞれの子どもの顔をふりかえりつつ、「体験格差」を考える大学の講義の一場面

横浜市六角橋に位置する神奈川大学横浜キャンパスのある講義を訪れたとき、その場の200名ほどの学生のうち半数程度が県内出身者で、もう半数は他都道府県出身者だと聞きました。若者の社会参画という文脈から考えると、この他都道府県出身の彼らにいかに地域が接点を持てるかということは大きな課題です。この一種のブルーオーシャンに切り込んでいるのが今回の「体験型研修」や、「かながわユースフォーラム」の事例だと捉えることもできます。

「体験型研修」のプログラムからは、体験は学生が様々な地域人材に出会う場になっていることがわかります。県外での活動も含め、その土地、その環境だからできる体験は、その地域にいる人との出会いであり、それこそがまちとの出会いそのものです。これは県内出身者にとっても、まだ知らない神奈川と出会うという意味で大きな意味を持つものだと言えます。

彼らがまちを発見し、心が動き、思い出をつくり、あるいは帰属意識を持ち始めるとき、初めて地域は「居場所」になり始めるのではないのでしょうか。

一方で、地域の活動に取り組む多くの大学生が、卒業すると地元に戻ったり、就職して時間に制約が生まれたり…と、その地域から去ってしまうことを残念がる地域の声が多くありません。若者が地域を通り過ぎて行ってしまう。築いてきた関係性まで卒業されてしまうようで、寂しさを覚えることは自然なことかもしれません。

ただし見方を変えると、彼らの長い人生の物語の1ページに、我が地域が登場し、自らもキャストとして出演する。そのことを想像すれば、地域の大人にとってはたとえ短い時間に感じられたとしても、やはりすばらしい出会いであることに変わりはありません。地域の活動に新陳代謝がもたらされるという意味でも、大切な機会としてつないでいきたいところです。

「地域」という言葉は曖昧です。例えば子どもは、最寄りの駅や小学校区として認識し、成長とともに行動範囲を広げる中で、地域のイメージを次第に区や市町村にまで広げていきます。

やがて大人になると、住居にかかる費用を払って生活するからこそ、もしかしたら小学生に近い視点に「地域」をダウンサイジングして捉えていくのかもしれませんが。

上記に比べると行動範囲の広い大学生は、近所に住んでいなくても、関心を持てば地域の活動にコミットすることができる、大げさに言えば「世界」が「地域」になり得る特別な年代です。そんな彼らにとって、実は神奈川県というサイズ感は、まちへの参加・参画の最初のステップとして非常にちょうどよい環境であると言えます。

今回の事例の活動のフィールドである神奈川県は、横浜を中心とした都会のイメージで語られることが多いですが、変化に富んだ地形、豊かな自然環境にも恵まれた地域です。

産業も様々で、企業も多く、交通機関も発達しています。文化的にも資源が多く、小さな県内の各地にご当地名物や「聖地」が山のように存在しています。昔を偲ばせる古墳を持ち、やがて古都や城下町を育み、開港の舞台となり、未来的な都市をも備える神奈川県は、四次元で捉えても無いものが中々見つからないほど充実した地域です。そしてそんな神奈川県だからこそ、抱える社会課題も日本の縮図と言える部分があります。

「体験型研修」の事例は、多様性に富む神奈川県のポテンシャルが生かされ、学生が知らない神奈川の姿を発見し、体験することにおもしろさがあります。「かながわユースフォーラム」では、それがさらに課題解決につながっていきます。

神奈川というフィールドでは、プログラムづくりの可能性は限りなく豊かです。学生と地域がどのように出会い、どんな活動をともにするか。

挑戦しがいのある「地域」、それが私たちの「神奈川」です。

(事務局職員 長南 悠太)

サポーター、というライフスタイル

県立青少年センター人材育成推進事業
「ステップアップキャラバン」／
神奈川県子ども会連絡協議会



子どもたちを地域で支える、「子ども会」をご存知ですか。

一般には小学生が参加するもので、お祭りやキャンプを楽しむ団体、と思われていますが、実は参加者の一部にはその後も中学校入学後にジュニア・リーダー（JL）、大学生年代になりユース・リーダー（YL）として、子どもの支援者、指導者に育っていく若者もいます（市町村によって名称や組織体系が異なります）。

県立青少年センターでは、主にそんなYLのスキルアップを目指して「ステップアップキャラバン」という事業を実施し、県内各地の子ども・若者向けのイベントに派遣したり、支援・指導者のネットワーク化の促進を図ったりしており、将来的に地域で活躍する方々となることを期待しています。

と言っても、彼らのその活動はほぼ手弁当。通称「ユースサポーター（YS）」として各地の事業で活躍する彼らは、貴重な休日にどんな思いでボランティアに臨むのか。事例とともに、彼らの地域に向けるまなざしと声をお届けします。



（上）2022年度のユースサポーターのみなさん

（中）バルーンアート制作の一コマ。派遣依頼の内容で1・2を争う

（左下）大和市事業で、ゆるキャラ「ヤマトン」も実は…！



活動事例 (2024年度)

伊勢原市子ども会育成会連絡協議会
「夏の指導者研修会」の講師・進行

日にち 8月18日(日)

会 場 伊勢原市民文化会館

参加者 計25名

(内訳) ユースサポーター2名、子ども会育成者及び児童・幼児等23名

概 要

ゲームアクティビティとバルーンアートの講師として活動。時間の制約がある中でプログラムを工夫し、当日はタイムマネジメントをしながら参加者の満足度が高くなるように進めました。特にアクティビティを利用して進めたアイスブレイキングでは、参加者のレベルに合わせて臨機応変に実施しました。

(参加者より)

「前半の身体を使った遊びと後半のバルーンアート、頭をスッキリさせてスタートできました。バルーンアートは難しいイメージで作成は初めてでしたが、思ったより色々楽しかったです」

「とても親しみやすい導入でわかりやすい説明でした。実践しながら、子ども達も憧れを抱いてくれるといいなと思いました」

「イベントを企画する際『1年生でも楽しむことができるか』を大事に考えていますが、今回行った手遊びはアイスブレイクとしておこなえるなと思いました」

大和市子ども会連絡協議会事業
「かるた大会」の運営補助

日にち 9月7日(土)

会 場 大和市スポーツセンター

参加者 計128名 (内訳) ユースサポーター4名、児童等124名

概 要

大和市の児童を対象に実施している、大和にちなんだかるたを用いて行うかるた大会の運営を支援。開会中は前面には出ず、主催する地元の子ども会に配慮し、運営のサポートに徹した。また会場準備や後片付けも含め、それぞれが柔軟によく動いていました。

(大和市職員より)

「地元子ども会に対し、常にサポートに徹する姿を拝見しました。必要な時にアドバイスを与え、遠くから見守ってくださり、心強く感じました。日頃から意識を高く持ち活動なさっていることが伝わりました。また、主体的に市子連の準備を手伝ってくださり大変助かりました」

(上) 白熱したバトルが繰り
上げられる！(左) 大和市内のみんなとパ
ンチャリ(下) ユースサポーターによ
るデモンストレーション

よこはまユース事業 横浜市立みなと総合高校内居場所カフェ 「みなとカフェ」でのバルーンアートワークショップの企画・運営

日にち 10月17日(木)

会 場 横浜市立みなと総合高等学校

参加者 計182名(内訳) ユースサポーター2名、生徒180名(随時開催)他

概 要

(公財)よこはまユースが横浜市内3校で展開する校内居場所カフェのひとつ、「みなとカフェ」は月に一度開催し、地域団体をはじめとする様々な支援者が多様なワークショップを展開しています。

今回はユースサポーターのスキルを生かし、初心者から経験者まで楽しめるバルーンアートのワークショップを実施。運営にあたっては周囲に目を配り、準備、片付けにも積極的に取り組みました。アイスブレイキングができない環境の中でも初対面の参加者に対し適切に距離を縮め、楽しい空間を演出していました。

(よこはまユース職員より)

『普段体験できないバルーンアートができて楽しかった!』『お姉さんが優しく教えてくれて、上手にできた』『またやってみたい!』と高校生たちが話していたと共有いただいています。年齢の近い大学生のお二人が講師としてワークショップを開催してくださったのが、生徒たちにとっては新鮮だったと思います』



(左) 今回の目玉として取り上げていただきました

(中) オープンスペースのカフェは人の波

(右) レベルに応じた難易度にチャレンジします

綾瀬市子ども会育成連絡協議会事業 「綾瀬市少年リーダー研修会」の運営補助

日にち 10月26日(土)、27日(日)

会 場 厚木市七沢自然ふれあいセンター

参加者 計50名(内訳) ユースサポーター4名、児童30名、育成者等16名

概 要

綾瀬市子ども会育成連絡協議会が実施している少年リーダー研修会について、運営するJLC of あやせ(綾瀬市域のジュニア・リーダーズクラブ)の運営サポートとして、特に子どもたちの班に同行する役割などを担当。レクリエーションゲーム、野外炊事、キャンプファイヤー等を指導する場面では、周りを見ながら協力をし、次の動きを考えながらお互いに働きかけることを心掛けていました。

(綾瀬市職員より)

「綾瀬市ジュニア・リーダーの人員不足のためユースサポーターのお手伝いをいただきありがとうございました。大変助かりました。今後もよろしくお願いいたします」

茅ヶ崎市事業

「第1回リーダー教室(秋)」の講師・進行

日にち 11月17日(日)

会 場 茅ヶ崎市役所

参加者 計23名(内訳) ユースサポーター2名、児童等21名

概 要

茅ヶ崎市では、子ども会や、地域・学校での活動の中で、小学校中学年から高学年の子どもたちがリーダーシップを発揮し、中心となって活動していくことをサポートするためリーダー教室を実施しています。参加対象は市内在住の小学3～6年生で、子ども会入会者に限定することなく、幅広く募集をすることが特徴です。

第1回リーダー教室(秋)は「楽しく体験、楽しく創作」がテーマとなっており、コミュニケーション能力や創造力、協力する力を身につけ、リーダーシップを引き出したいというオーダーを受け、アイスブレイキング体験やバルーンアート体験を実施。当日ははじめましての小学生もいる中、講師2人のあたたかい雰囲気づくりによって和気あいあいと進めることができ、小学生の「やってみたい!」を引き出す研修にすることができました。

(茅ヶ崎市職員より)

「ユース・リーダーさんの暖かい人柄と丁寧な対応により、子どもたちは楽しく気持ちよく学ぶことができたと思います。この教室の目的(コミュニケーション能力や創造力、協力する力を身につけリーダーシップを引き出す)をしっかりと汲み取っていただき、進行していただけて大変感謝しております」

地域の子どもと歩む

ユースサポーターが語る ボランティア活動への思い

ユースサポーターとして各地の現場に赴く若者には、県内で生まれ育ったという共通点があります。そんな彼らに、ボランティアへの思いや地域、地元への思いを尋ね、持続可能な活動について一緒に考えました。

回答項目

- ① ボランティアのやりがい
- ② ボランティアを続けるモチベーション
- ③ 地元や神奈川県への思い
- ④ 子ども会への思い



Kohji Tsuchiya

土屋 虹平さん

厚木市出身のアウトドア派、「つつちー」。
現在は農業を営みつつ、豊富な経験を生かしてジュニア以外の現場でも子どもの体験活動をサポートしている。
趣味はウルトラマン。

- ① 子どもたちの笑顔がみられることです。
自分は誰かのために何かすることが好きなので、素敵な笑顔が見られることはボランティアのやりがいです。
- ② 子どもたちが体験を通して見せてくれる色々な表情を見られることです。
最初の緊張していて不安だな…という顔から、だんだんとほぐれていって、「たのしい！」という顔になる変化は見ていて楽しいし、嬉しくなりますね。
- ③ 地元の子ども会は「小学校に入学したらみんな会員」という方針でした。そこで地元の方と関わりながら学生生活を過ごしてきました。そこで得た経験は自分の糧になっています。
また、厚木は周辺環境のバランスが良く、ちょっと都会、ちょっと田舎みたいな感じがとても好きです。遠出しなくても自然体験ができるのは恵まれていたな～と感じます。今は地元に離れてしまっていますが、先々自分の仕事（農業）がなんらかの形で地元に戻元できれば恩返しになるのかなと思います。
- ④ 現状、子ども会は会員数が減少傾向にありますが、子ども会の良いところは残っています。子どもたちには、子ども会で様々な体験を通して異なる年齢の人と交流したり、普段はできない体験をすることで色々な楽しさを感じたりしてほしいです。
そのきっかけ作りや架け橋として、これからも何らかの形で関われば良いと思っています。

- ① 子どもたちの笑顔が見られること、誰かのためになることができていると実感できること
- ② 楽しいから。
ボランティアを続けていく中で、様々な経験を積むことで得られるものがたくさんある。けれど、それはあくまで副産物のように思っていて、子どもたちや接した人が笑顔になってくれることで、自分も笑顔になれるし、楽しい・嬉しいと感じることがモチベーションにつながっていると思う。
- ③ 地元の子ども会がなくなってしまう、減少してしまうことに寂しさを感じるとともに、自分にもっとできることはないのかという思いがある。
地元での活動自体は現在していないが、神奈川県内の活動に関わっていることが神奈川県のためになり、ひいては地元のためになっていると嬉しいなと思う。
- ④ 地元の子ども会がなくなってしまう、寂しく感じるし悲しい。
関東のほかの地域でも、子ども会活動が縮小しているというのを聞き、このままではさらに子ども会活動が縮小してしまうことに危機感を覚えている。
子ども会活動がなくなってしまうことで、子どもたちがそこで得られたはずの経験や交流の輪が途絶えてしまうことはとても残念に思う。だからこそ、自分（たち）が活動を続けることで子ども会活動を活発にしていけることが大切なのではないかと思う。



Chika Funamatsu

船松 千夏さん

海老名市出身の「ちか」は、頼れるみんなのお姉さんの存在。
ジュニアに関わることならなんでもできるけれど、特にバレーボールの腕前は超一流。



溝井 美花さん

鎌倉市出身の「ぞい」。
よく食べ、よく動き、よく笑う。
事業で子どもと関わった経験を
生かして、現在は子どもをサポート
する職業に就き活動している。

- ① 参加者が「楽しかった」と言う、笑顔が見られた時。
出会った人とひとつのものを創り上げられた時。
- ② 参加者の笑顔や、「たのしかった」、「また遊ぼうね」と言った言葉。
新しい仲間との出会い。
- ③ 自身がジュニア・リーダーとして活動していた際に、サポートして
いただいた方や今までお世話になってきた方々に、その分を活動で返してい
きたい。
- ④ 自分の住んでいた地域には子ども会が無かったが、ジュニア・リーダー
に所属したことによって、学校外で居場所を作ることができた。
また、その中で人前で話すこと、会の運営や企画の立案など、様々な経
験をすることができ、今の私の強みになっていると感じることも多い。

- ① 関わった人の、最初と最後の表情の変化が見られた時にやりがいを感じます。
自分がその人に対して満足のいく結果を出せたのだと思うと、やってよかった
な、間違ってたなと思ひ、安心感・満足感を得ています。
- ② ステップアップキャラバンは色々な現場で実施しますが、個人的には子ども会
関係の活動に出ることが多いです。子どもたちの満足感のある顔が見られたら
また次の機会に同じことをやりたいと思う、その繰り返しです。
同じ団体にいる仲間との雰囲気、空気感がいいのも継続して活動しようと思
う気持ちにつながっています。
- ③ あくまでも子ども会での活動をメインに今まで活動してきました。
地元厚木市や神奈川県には、公立の宿泊施設があり、そこで行われる事業もあ
ることを実はここ最近知ったので、カタチはどうであれ、子どもたちと関わる
活動をしていけたらと思います。
少子化に負けず継続して事業が行われる事を願いつつ、機会があれば自分も参
加したいなと思います。
- ④ 少子化で衰退しているのが残念ではありますが、子ども会だからこそ企画でき
たり体験できたりすることもあると思います。
消滅することなく、いつまでも続いてほしいと思います。



高橋 祐輝さん

厚木市出身のスポーツマン、「ゆうくん」。
営業職の傍ら、ジュニア
のキャンプ活動などを中
心に活躍している。キャン
プのギアにも詳しい。

番外編：地元の若者と歩む

戦後まもなく、子どもを健やかに育てることを
目的に生まれた子ども会は、近年減少の一途をた
どっています。2023年には、自治会や小学校区ご
との「単位子ども会」は、ピーク時の3分の1と
なり、全国で5万3000余りとなりました。

全国子ども会連合会は、少子化が進み、共働き
世帯が増え、子ども会の運営を担う保護者の負担
が増し、担い手不足に陥っていること、コロナ禍
で活動が制限されたことがさらに「子ども会離れ」
に拍車をかけたことと分析しています。

同じく地域で子どもを支える枠組みとして、自
治会やPTA、各種保護者会などでも、それぞれが
担い手不足という課題を同様に抱えている現在、
互いを補い合うべく、研修などでも相互に参加し
合いながら、「地域」を再構築するタイミングにな
りつつあるのかもしれません。

社会全般で、単発のアルバイトが流行している
ように、学校行事なども単発のボランティアで運
営する地域が増えてきました。この流れは、おそ
らく今後も加速していくことになるでしょう。

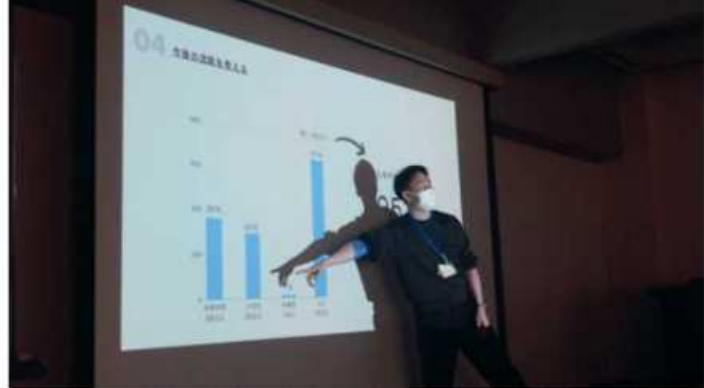
子ども会について全国に目を向けると、例えば
保護者ではなく大学生ボランティアが運営してい
たり、従来の自治会単位ではなくマンション単位
で結成されていたりと新たな形も模索されていま
す。県内でも、「活動事例」にみられるように、
市町村の青少年主管課がボランティアとともに運
営を支援しながら活動する地域もあります。

子ども会の持続可能性を考えると、今後は保
護者以外の若者の関わりが鍵になりそうです。す
なわち、若者が何を望むのか、どんな魅力を感じ
ているのかを感じ取ることで、コーディネ
ーターの出現が多く地域で待たれています。

(事務局職員 長南 悠太)

エディターズ ノート

数値に表れない価値



数値で示すと一見説得力があるが…（イベントボランティアセミナーより）

■ 成長の瞬間

解けなかった算数の問題が解けるようになったり、少しずつ大きくなる手だったり、公園で他の子に優しくできる瞬間だったり、ふいに親に感謝を伝えたり…。

注視しなければ見逃してしまうような、子どもの成長の場面に立ち会えることの幸せは何にも代えがたいものです。

■ 「評価」という壁

学校生活に目を向けると、授業で新しい漢字が書けるようになったり、友達をつくったり、仲直りする方法を考えたりと成長の瞬間がたくさんあります。それらを見守り、時には「支援」することが先生の役割です。一方で、その成長を数値や言葉で「評価」することも役割の一つです。

「評価」について少し考えてみましょう。平成29、30年に、幼稚園や小学校、中学校、高等学校の学習指導要領の改訂がありました。アクティブ・ラーニングという考え方が求められ、世間的にも広く使われるようになりました。直訳は、「活動的な学び」ですが、これは「話し合いや発表が多いこと」ではありません。「子どもたちの頭の中が活動的に働いているか」が重要であり、発言や行動などで表出しないものも内包します。

しかしながら、頭の中が活動的かどうかを見取することは、極めて困難です。学校のテストで、紙面に書かれた解答がその子の思考のすべてではないように、頭の中で考えていることは直接他者にはわかりません。答えに至るまでの過程、その紆余曲折に隠れた成長を含めてより正しい評価につながるでしょう。

一方で子どもの中には、成績や評価に固執してしまい自分を見失う子も少なくありません。

「あまり人前に立って話すことが得意でない自分はダメなんじゃないか…」、「学校の成績が悪い自分は社会でやっていけないのではないか…」。

子どもたちのこのような心の動きを思うと、子どもたちを「評価」という役割が、成長、ひいては「支援」することの障壁になり得るのではないかと考えてしまいます。これを解消すべく、学校現場では、その手段を今も模索し、努力が続けられています。

■ 成長に寄り添う情熱

ここまでは子ども個人の評価について考えてきましたが、組織の評価に視点を広げてみましょう。前述のとおり、子どもの成長を正しく評価することは非常に難しいものです。言い換えれば、教育や支援の成果も非常に見えづらいということですよ。

この章にあったユースサポーターの記事の中で、次のような発言がありました。

「子ども会は会員数が減少傾向にあります但し子ども会のいいところは残っています」、「子ども会活動が縮小してしまうことに危機感を覚えている」…。

現在、全国的に子ども会の会員数は減少傾向にあります。各地域の子ども会はなくなくなり、市町村によってはジュニア・リーダーがおらず、休会しているところも少なくありません。ここだけ数値で切り取れば、成果が芳しくないと言わざるを得ないかもしれません。しかし、これだけでは、正しい「評価」とは言い切れないのではないのでしょうか。これも一つの結果として受け止めるべきではありますが、この資料にあるような、紆余曲折に隠れた活動の成果に目を向けてみたいものです。

私は、県立青少年センター指導者育成課の職員として、ジュニア・リーダーやユース・リーダーと関わってきました。彼らは子ども会活動が世間的に下火になってきていることを知りながらも、現場で力強く活動しています。そのモチベーションとして共通しているのは、イベントに参加してくれる子どもたちの笑顔です。普段は遊園地でもらうバルーンが自分でつくれるようになったり、キャンプファイヤーの楽しさを体験したり、人と関わることの楽しさを知ったり…。注視しなければ見逃してしまうような、子どもたちの成長の場面を彼らは見届けることができます。彼らは子ども会を通じた自分たちの活動が、子どもたちの、地域の、役に立っているのだと信じています。

この記事を通して、子ども会という看板を背負った若者が、地域の子どものために懸命に取り組んでいる姿が、同じ世代の若者に前向きに評価されることを願います。

子どもの成長のそばに、若いリーダーの笑顔があり続けますように。

（事務局職員 山西 康介）

若者支援のアレンジレシピ

実例から掘り下げる、若者との活動の課題とヒント

SPICE01_参画のはしごから

居場所と参画の微妙な関係

#「参画のはしご」

#ロジャー・ハート

SPICE02_成長を可視化するふりかえり

次の活動に向かう仕掛けとしての「評価」

#「ボランティア活動報告書」

#ループリック評価

#CUDBAS手法

SPICE03_コーディネーターのためのQ&A

お悩み相談と編集委員の視点

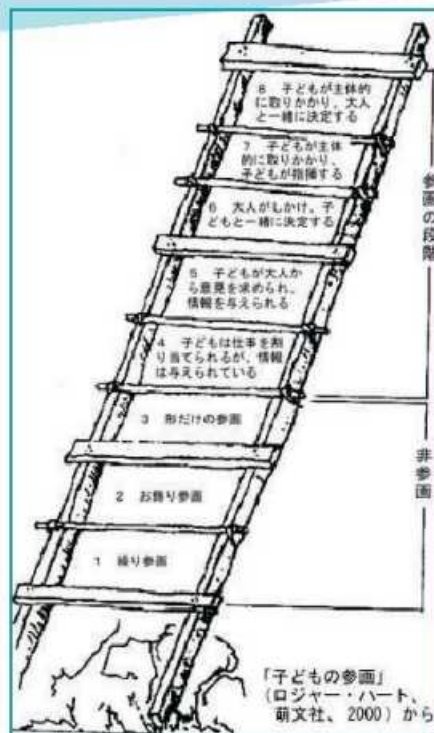
#「関わり方」の加減

#「目標」の持ち方

#「連絡方法」のツール

若者の居場所や、地域での活動を考えるとき、「参画のはしご」という言葉がよく語られます。「参加」は既にある場所やプログラムに加わることで、「参画」は計画の段階から加わったり、責任を分かち合う形で参加したりすることと理解されています。

何度も聞いてきた言葉だからこそ、自らの現場や色々な場面、ニュースやまちの若者を思い浮かべながら、改めて考えてみましょう。若者や地域、事業の見え方が、明日から少しだけ変わってくるかもしれません。



■ 「こどもまんなか」の芽生え

近年、子ども・若者の社会への参加、参画に注目が集まっており、大小を問わず多くの事例が報告されています。学校では「総合的な探究の時間」などを捉えプロジェクト型の学習に取り組んでおり、多くの地域でも「子ども参加のまちづくり」を進めています。行政としても、こども基本法に定められた「子どもの意見を行政に反映」させることを目的とし、「子ども目線会議」を実施するなど、意見を反映する仕組みを整えつつあります。

この背景には、1989年に国連で採択された子どもの権利条約の中で、比較的光の当たらなかった「参加の権利」への認識が徐々に浸透してきたことがあります。ロジャー・ハートによる「子ども参画論」は、この「参加の権利」を体系的に論じたものであり、若者を含む「子ども参画」を社会の意思決定に影響を与える過程として定義しました。子どもは自らの人生の自己決定に関与することはもちろん、地域社会や家庭、学校、さらには社会全体にまでその関与の範囲が広がるべきだとし、子どもの自発性や主体性の重要性を強調しています。その文脈で、ハートは、有名な「参画のはしご」(The Ladder of Participation)のモデルを提唱し、子どもの参画の形態を8つに分類し、その上がるにつれて子どもの主体的な関与が大きくなると説明しました。ここではハートの言う「子ども」を若者を含むものと確認した上で、以下みていきます。

■ 階層への基本的な理解

参画のはしごについては一般的に、子どもが計画から実行、評価に至るまでの全ての過程に参加することが望ましいとされていますが、初めからそこに到達する子どもはいないと言ってよいでしょう。その実現には大人が子どもたちの目標設定を支援し、彼らが自分のペースで成長できる環境を整える必要があります。近くの大人は日常生活を支援するユースワーカー、地域活動のコーディネーター、あるいは異なる主体の交流を促すファシリテーターの役割を担い、支援者として子どもの考えを尊重し、主役である彼らの意見に耳を傾け、子どもの力を引き出します。

参画の度合いが低い階層の段階は、大人によって与えられた仕事を果たしながら情報を受け取る状態で、形式的な参加に留まる「お飾り参画」、さらに大人の意向が強いものは「操り参画」と称されます。次の段階では子ども自身が意見を言え、さらに次には大人と共に決定する過程が含まれます。7段階目では子どもが主体的に行動し、指揮する形が理想とされ、8段階目になると子どもが自分たちの活動を考え、大人を巻き込むことになっていきます。事例として多く挙がる地域の伝統行事やボランティアなどは、役割を持ちながら納得して参加する、4段階目の状態が多いと言えます。

本稿ではここまで、参画のはしごの低い階層に位置する若者が、大人と日常を過ごし、地域で活動に参加し、高い階層に上っていく事例を取り上げてきました。

■ 参画のはしごモデルの課題

参画のはしごの捉え方については課題もあります。そもそもハートは、子どもたちの組織化と代表性の確保を通じて「民主主義の実現」を目指しますが、これは裏を返すと低い階層にいる子どもや地域活動が評価されない風潮を呼び起こにつながります。日常の中に安心していられる場所、居るだけでよい場所を求めている子どもたちは、何かをがんばりたいわけではありません。そういった子どもも存在することを社会が認識し、居場所を確保する視点を失ってはなりません。遊び場やユースセンターなどの身近な居場所がこれにあたります。

また、参画の好事例として挙げられることの多い子どもによる議会などは、非日常的な場に少数の若者が選抜されて参加するというケースです。選抜される子どもは各学校の生徒会長、ということも少なくなく、全ての子どもに機会を提供することが難しいという意味では、参画する一部の層を固定化する働きもあるということは押さえておく必要があります。

参加・参画の段階の高低だけを問うのではなく、日常と非日常の両輪に、それぞれの子どもの状況に合う様々な居場所がある状態が理想と言えます。

また、子どもの参加は本来自発的なものですが、大人が子どもを参画させる構造が多くみられます。様々な施設や事業の事情がある中で、ここから完全に脱却することは困難かもしれませんが、大人はせめてそのことに自覚的でありたいものです。特に社会や地域のために参画させる、という考え方に陥ると、結局は子どもの視点を離れ、大人が子どもを利用し、「共生社会」を謳いながら関係性に優劣を持ち込むこととなります。さらに、「参画能力を育成してあげる」という発想自体も、子どもを大人に従属させる側面を持ち、注意が必要です。子どもに寄り添うコーディネーターの存在が、こういった構造を緩和する一つの鍵になります。

■ 地域：コミュニティからの視点

子どもの参画の効果としては、子ども個人としての成長がありますが、コミュニティの側にも変化が生じます。例えば、2011年の東日本大震災の際、子ども会の活動が盛んな地域では避難所の開設や運営がスムーズに進んだ、という言説があります。子ども会で行うキャンプ事業などの体験が災害対応の際に活用できたのかもしれませんが、ジュニア・リーダーやユース・リーダーなどの若者が運営側に入りやすい人間関係があったということも示唆されています。ハートの目指す、民主主義の実現や社会を変革するというマクロ的な発想はありつつも、生活する場の生きやすさに直結する、地域に与えるミクロの影響こそ、結果的として重要な効果になっているのかもしれません。

子どもの社会参画の場を、大人が知識や技術を提供（：教育）する場として構築することは容易です。しかし、場をコーディネートする大人は、参画のはしごを上らせようとするのではなく、意識しつつも結果として上っているとい、くらいに捉えておいた方がよい場面もあるのではないのでしょうか。やや極端に言えば、はしごは上らなければならないのではなく、子どもが上りたいかどうか、という主体性の方が重要です。

多くの場合、子ども、特に若者の前向きな変化には、若いコーディネーターや年下の参加者の存在が重要らしいことが見えてきています（本稿CASE_02、03、04、07）。また、コーディネーターが若者と地域それぞれと事前に関わり方を調整し、無理なく出会えるようにしておく準備も重要な要素です（本稿CASE05、06）。若者の立場に立つと、日常的な生活の中に異年齢との関係が生まれ、地域との関係性が深化していく、無理のない営みにこそ「参画のはしご」の持続可能性があります。

（事務局職員 長南 悠太）

<参考文献>

- ロジャー・ハート（2000）『子どもの参画 コミュニティづくりと身近な環境ケアへの参画のための理論と実際』 萌文社
神奈川県立青少年センター「体験学習、子ども・若者の参画、子どもの権利条約について（育成指針の参考資料-3）」
<https://www.pref.kanagawa.jp/docs/ch3/ikusei/kyougikai/sankou3.html>（2025.3.15 アクセス）
山下 智也（2009）「子ども参加論の課題と展望：ロジャー・ハートの「子ども参画」論を乗り越える」
九州大学学術情報リポジトリ https://api.lib.kyushu-u.ac.jp/opac_download_md/18422/p101.pdf（2025.3.15 アクセス）
五十嵐 牧子（2001）「生涯学習社会における「子どもの参画」についての一考察」 文教大学付属教育研究所紀要第10号
川崎市子どもの権利フォーラム編（2024）『今だから明かす条例制定秘話』第2版 エイデル研究所
藤原文雄・生重幸恵・竹原和泉・谷口史子・森万喜子・四柳千夏子（2021）
『学校と社会をつなぐ！これからの人づくり・学校づくり・地域づくり』学事出版

若者との活動では、ふりかえりを行う場面が多く出てきます。

ただ、このふりかえりというのが実に厄介。家庭や学校での「評価」を逃れてきた若者たちがいる一方、入学試験、就職活動での活用を目的とし、「高評価」のみを求めている若者もいます。さらに、そこに学びとして定着することを期待する大人の姿もある…という中で、どのようなふりかえりが適しているのかはそれぞれの現場次第、地域やコーディネーターの腕の見せどころなのかもしれません。

ただ、若者の居場所となる施設側や事業を実施する立場としては、若者を評価するというよりも事業を評価するという意味での「ふりかえり」の必要性もあります。事業をよりよくするためには利用人数や参加人数といった量的評価、心の動きといった質的評価の双方の観点が必要ですが、特に後者を数値化することは難しい部分があります。

教育心理学的な観点に立てば、不登校やいじめの防止、対人関係能力の育成に使用される「hyper-QU」（河村、2006）のようなアンケート調査の導入が効果的だと考えられますが、これは生活支援に寄った施設に限られ、その他の全ての現場や活動で応用できる方法とはなりません。

質的な評価を、どのように実施するか。さらにそれを、事業実施者だけではなく若者自身の心に働き掛けるふりかえりにするにはどういった方法があるか。大切なことは、若者自身が自身の心の動きを肯定的に評価できる仕組みです。ここでは、地域活動を「ボランティア活動」という見方に改め、若者自身のふりかえりについて、3つの方法を取り上げます。

■ ボランタリーな活動を評価するということ

比較的多くの現場で取り入れやすい取組みに、任意の書式を作成して活動に応じて蓄積していく方法があります。この場合、若者本人がふりかえりとして後日見られる、活用できる様式であることが求められます。大学入試の総合型選抜や学校推薦型選抜(注：IBAO選抜)では、各校が様々な様式への記載を求めますが、こういった形に近いものです。

ボランティア活動、あるいはボランタリーな活動は、自らのやりたいという内発的な動機から取り組むことが理想ではあります。

ただ、現実に入試試験、就職活動での活用を目的としている参加者もいる以上、書式はそういった需要にも耐えうるものである方がよりよいと若者は考えています。またそれらを目的としていない参加者であったとしても、いつか忘れてしまうのはもったいないことでもあります。

つまり若者の立場に立てば、「任意の書式」を求める条件は、

- ①例えば各校の入試試験に係る別様式に転用が可能なレベルで詳細であり、
- ②一方で作成・記入の負担感が低く、
- ③後日活動の履歴をポートフォリオとして活用できる、この3点だと言えます。

さらに、「若者自身が自身の心の動きを肯定的に評価できる仕組み」として、私たちとしては加点法、あるいは絶対評価としてふりかえる方法であるということにもこだわりたい点です。

こういった方法を取り、私たちも活用可能な形で書式を公開する団体があります。「ボランティア活動報告書・総括ボランティア活動報告書」を作成した公益財団法人さわやか福祉財団です。

■ 「ボランティア活動報告書」 「総括ボランティア活動報告書」

(公財)さわやか福祉財団は、高校生や大学生に対し、

「一人ひとりが主体的に自らの強みとなる特性を育て、自身の充実感に満ちた人生を送ってほしい」と願っています。そのためには、目的をもって地域等のボランティア活動に積極的に参加し、社会課題を理解し、関係者とも協働してその解決のために努力する体験をする中で、社会に有用な自己の特性を確認し、それを伸ばしていくことが大切」であると伝えます。

これはボランティアへの参加を通じ、社会課題の理解、他者との協働、自己の特性(強み)の理解を促すというものです。これは、参画のはしごにおける4段階目以降のまちにおける若者の活動と非常に相性がよいものです。

この様式が整えられた背景を、報告書では「これからの社会に求められる力とは」という部分で次のように言及しています。

「2018年度に一般社団法人日本経済団体連合会(筆者注：経団連)が示した「高等教育(筆者注：大学、専門学校等)に関するアンケート結果」から、企業は学生に「自らの問題意識に基づき課題を設定し、主体的に解を作り出す能力」を求めていることが分かりました。具体的には「主体性」、「実行力」、「課題設定・解決能力」、「チームワーク・協調性」、「リーダーシップ」の5つの特性に分類し、この特性を効果的に育む場としてボランティア活動を推奨しています。」

文部科学省や中央教育審議会の資料に依拠して分類された特性、「情動的・意欲的な面の特性」である①自発性・主体性と②実行力・責任感、「対人関係的・社会関係的な面の特性」である③チーム

ワーク・協調性、④リーダーシップ、「認知的・課題解決的な面の特性」である⑤課題解決・創造力という分類は、ボランティアで想定される様々な活動においてバランスがとれており、さらに自由記述欄が設けられていることからカスタマイズも可能になっています。

入学試験や就職対策としては非常に質の高い様式であると言えます。

神奈川県立青少年センターでは、CASE_07のユースサポーターについて、2024年度この様式を参考にし、活動のふりかえりを実施しています。彼らは基本的には入学試験や就職活動での活用の予定はありませんが、地域の声がフィードバックされることを好意的に捉えているようです。2025年3月現在、効果検証は途上ではありますが、一定の効果を見込んでいます。

ボランティア活動報告書の手引き・ 総括ボランティア活動報告書等の ご案内



高校生・大学生用の手引きの他に、活動関係者用、高校・大学進学・就職担当用があります。また総括ボランティア活動報告書の見方についても大学入学者選抜担当用、企業採用担当用があるのでそれぞれ確認することをお勧めします。なお、記入用の下のシートはExcelでも配布しています。



ボランティア活動報告書の手引き（高校生・大学生用）

なお、神奈川県立青少年センターでは、現在総括ボランティア活動報告書の作成には至っていません。今後こういった活用が考えられるか、ボランティア：事業参加者とともに考えていく予定です。

この様式は、参画の階層が高い若者に特に効果的ですが、低い階層であっても、丁寧にこういったふりかえりを行うことで参加・参画のステージが内発的に引き上がっていく効果もあるとみています。

様式の細かな活用方法はリンク先へ譲りますが、ここでは実際に作成したイメージを抜粋して紹介します。次の活動への前向きな姿勢を持つことができる「評価」を、ぜひ一度検討されることをお勧めしたいと思っています。

高校生・大学生用の活動報告書記入用シート

高校生・大学生用	ボランティア活動関係者用	高校・大学進学・就職担当用
1. 活動の目的・意義	2. 活動の計画・実施	3. 活動の振り返り・評価
4. 活動の成果・効果	5. 活動の課題・改善点	6. 活動の感想・意見
7. 活動のまとめ	8. 活動の総括	9. 活動の未来

ボランティア活動報告書記入用シート

高校生・大学生用	ボランティア活動関係者用	高校・大学進学・就職担当用
1. 活動の目的・意義	2. 活動の計画・実施	3. 活動の振り返り・評価
4. 活動の成果・効果	5. 活動の課題・改善点	6. 活動の感想・意見
7. 活動のまとめ	8. 活動の総括	9. 活動の未来

ボランティア活動報告書【記入要領】

氏名

活動期間

活動内容

活動の動機・目的

活動から得たもの

活動で育った特性

活動に対するコメント

活動関係者記入欄

記入日

総括ボランティア活動報告書【記入要領】

学校名

氏名

活動分野

特性

本人のコメント

活動関係者の主なコメント

(上) 活用のイメージ
(左) 記入例
(下) 今年度、実際に青少年センターで使用している形式（CASE_07「ステップアップキャラバン」より）

ボランティア活動報告書

氏名

活動期間

活動内容

活動の動機・目的

活動から得たもの

活動で育った特性

活動に対するコメント

活動関係者記入欄

記入日

■ ルーブリック評価

より個々の若者の現在地を丁寧に分析し、ふりかえりを詳細に行う方法として、「ルーブリック評価」があります。ルーブリックとは、評価基準を整理し、段階ごとに達成度を示した評価表のことです。

具体的には、ボランティア活動に先立ち、縦軸に「評価レベル（例：優れている、十分、改善が必要）」、横軸に「評価項目（例：情報収集、分析力、発表の明確さ）」を設定し、交差するセルに具体的な判断の基準を文章で記述するというものです。

そして活動後のふりかえりでは、この表を元に自己評価を行います。これにより、「何をどのように達成すれば良いか」が明確な活動になり、活動中の指針となります。

近年、学校教育の現場では、探究学習等でも既にこの方法を取り入れている地域もあるので若者の方がもしかすると実施方法に詳しいかもしれません。ただし、学校では各回の授業ごとに作成し、しかも授業を受ける生徒全員が同じルーブリックに対して取り組むのが基本ですが、ボランティアについては成績評価を行うものではないので同じようにする必要はありません。

毎回作成せずに事業ごとに作成する、コーディネーターとともに各参加者がそれぞれ考える…、というような、緩い進め方の方がむしろ効果を挙げられるように感じます。

作成方法は、

- ①活動で伸ばしたい資質・能力を明確にする、
- ②評価項目を3～4つ設定する、
- ③評価基準を文章化する、
- ④判断基準を3～4段階で設定する、
- ⑤評価表を完成させ、配点を決定する、

です。このとき、学校の成績評価では例えばC評価など改善が必要とする基準に関して、「～できなかった」といった書き方をすることもあります。

地域でのボランティア活動では、そういったネガティブな書き方を乗り越え、できたこと、取り組んだことに焦点を当て文章化の方が、より安心して取り組むことができます。コーディネーターが丁寧に関わり、若者が、自らのやりたいこと、伸ばしたい力をともに考えて計画・実施することで、主体的な活動や前向きなふりかえりにつないでいくことが期待できます。

実施後は、本人がマス目に丸を付けたり、コーディネーターや地域の方がスタンプを押したりするといった活用が考えられます。基本的に点数化は必要ないと思われますが、数値として事業実施者側の評価に転用する場合、匿名化するなどプライバシーに配慮しましょう。

リンク先にわかりやすい解説が載っていますので、ぜひご一読ください。コーディネーターと若者がともに取り組むという意味でも意義のある評価方法なので、チャレンジする価値があると思います。



ルーブリック作成のイメージ（CASE_07「ステップアップキャラバン」より）

〈ルーブリック表例①：企画段階など〉

評価観点	A(優れている)	B(十分である)	C(改善が必要)
役割分担と協力	全員が積極的に役割を担い、協力し合っている	大部分のメンバーが協力できている	一部のメンバーに作業が偏っている
対話の進め方	積極的な発言があり、建設的な議論ができていく	話し合いが進むが、意見が限られる	意見が一方向的で、対話が少ない
成果物の質	情報が整理され、完成度の高い提案が作成できた	大枠は整理されているが一部不足	情報整理や内容が不足している

〈ルーブリック表例②：発表段階など〉

評価観点	A(優れている)	B(十分である)	C(改善が必要)
発表内容の構成	情報が論理的に整理され、主張が分かりやすい	情報は整理されているが、細部に不足がある	情報整理が不十分で、伝わりにくい
スライドや資料の工夫	図表や写真を適切に使い、視覚的に分かりやすい	図表や写真を使用しているが一部冗長	文字が多すぎたり視覚要素が欠けている
発表態度	声の大きさや話し方が聞き取りやすく、落ち着いた	声は聞こえるが、一部説明が早口	小さな声や早口で、聞き取りにくい
質疑対応	質問に対し、冷静に対応し、分かりやすく説明できた	質問には答えたが、やや説明が不足している	質問に対し、答えられなかった

CASIO「ICT教育・GIGAスクール構想関連コラム」
『ルーブリックとは？活用の意義や作成手順、探究学習やグループワークでの活用例を解説』より



CASIO「ICT教育・GIGAスクール構想関連コラム」
『ルーブリックとは？活用の意義や作成手順、探究学習やグループワークでの活用例を解説』



リクルート進学総研「探究活動におけるルーブリック 小瀬高校 令和5年度版」

■ CUDBAS（クドバス）手法

本来ボランティア活動というのは、自己と他者の関わりの中での偶然の出来事にも結果や充実感が左右されます。若者にとっては、自身がどの程度活動に参加・参画できたのか、活動を通じてどの程度の自己の深化があったか、などを客観的に評価することは非常に難しいものです。

ボランティアの質的評価について、「一定の評価軸は存在せず、評価を行う主体者の問題意識、テーマや目的、課題等に基づき進めるもの」という立場に立つ神奈川大学の齊藤ゆか教授は、「自己評価」と「学習プロセス」の質的な評価を可能にする「CUDBAS」手法を実践しています。

これは、「A Method of Curriculum Development Based on Vocational Ability Structure」の略称で、「職業能力の構造に基づくカリキュラム開発手法」という意味で、ルーブリック評価をさらに詳細に、丁寧に実施するイメージです。

手法を開発した森和夫（1989）は、

- ①作業が短く、結果が早く出ること
 - ②手続きがシンプルで簡単であること
 - ③小集団により意思決定を行うため、妥当性が高くなること
 - ④作成者が第一人者であれば説得力があること
 - ⑤すべてのプロセスの記録が残ること
 - ⑥応用範囲が広いこと
- の6点を特徴として挙げており、この⑥の特徴を生かしボランティア活動で展開した事例が報告されています。

「ボランティア評価の国際的到達点とクドバス手法を用いた評価方法の効果性」（齊藤、2007）で紹介される事例では、全15回の講義の終盤3回のふりかえりの中で、CUDBASが右上の図の流れで実施されています。「7 メンバーで仕事カードの配列（重要度の序列）と技術・技能マップを作成」、「8 技能・技術のチェックリストの作成」を通して作成されたものが下の表です。

このボランティアの「必要能力・資質リスト」（：チャート）は、学生がカードに書き出し、整理した情報を手直したものです。似た内容のカードをまとめてボランティア活動に必要な資質・能力としてタイトルを付ける、という方法をとっています。

CUDBASによるチャート：「ボランティア活動に必要な資質・能力」

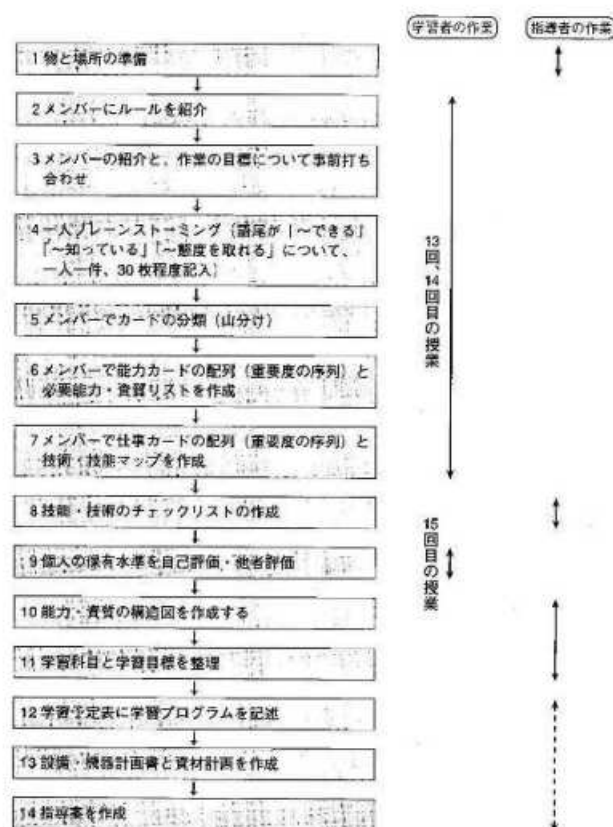
齊藤（2007）作成資料より抜粋

	必要能力	能力1	能力2	能力3	能力4	能力5	能力6	能力7	能力8	能力9	能力10
1	他者受容能力	1-1 相手の気持ちを理解することができる	1-2 周りに気を配ることができる	1-3 人をいたわることができる	1-4 人の立場に立って考えられる能力をもっている	1-5 多様な考え方も受け入れられる能力をもっている	1-6 周りに協調する能力をもっている	1-7 協調性を身に付けることができる	1-8 違う立場から物事を見られる	1-9 周りの人の様子をよくみる能力をもっている	1-10 人間観察ができる
2	感謝表明能力／信頼関係構築の能力／時間管理能力	2-1 来てくれた人に感謝することができる	2-2 「ありがとう」ということができる	2-3 感謝の気持ちを持つことができる	2-4 人を信じることができる	2-5 頼りにされることができる	2-6 信頼感を持つことができる	2-7 時間を守ることができる	2-8 時間管理能力をもっている	2-9	2-10
10	地域理解の能力	10-1 地域文化を知ることができる	10-2 地域資源をみつけることができる	10-3	10-4	10-5	10-6	10-7	10-8	10-9	10-10

（省略）

「CUDBAS」の進め方

注：森（1991）を参考に齊藤（2007）作成資料より





できなかったことではなく、できたこと、努力したこと、フォーカスするふりかえりが、次の活動への活力になる
(県立青少年センター事業「イベントボランティアセミナー」より)

このチャートにおける10項目は、①他者受容能力、②感謝表明能力／信頼関係構築能力／時間管理能力、③人間性構築能力、④自己形成能力、⑤コミュニケーション能力、⑥判断能力、⑦他者関係構築能力、⑧リーダーシップ能力、⑨自己環境拡大能力、⑩地域理解能力と分類されています。ボランティアに必要な「モチベーション」という言葉に、これほどの要素が含まれていることに気づかされます。



『ボランティア評価の国際的到達点とクドバス手法を用いた評価方法の効果性』
宮藤 ゆか (2007)

CUDBAS手法の評価基準は、5は「優れて知っている、もしくは優れてできる」、3は「一人前に知っている、もしくはできる」、1は「まったく知らない、もしくはできない」にあたり、4は5と3の中間、2は3と1の中間ということになります。

本来、能力開発のために強みと弱みを可視化することを目的とした手法です。数値による自己評価を行う前提で行われる仕組みであるため、主体的に継続的に活動している：参画のはしごの高い階層にいる若者に向いている方法だと考えられます。

詳細は左リンク先からご確認ください。ボランティアを経た学生たちの自己評価の平均値も紹介されており、より興味深い内容となっています。ルーブリック評価の先にさらに教育的な要素を加味したいとき、このCUDBAS手法が参考になりました。若者自身が自身の心の動きを肯定的に評価できる仕組みとして、一読をお勧めします。

(事務局職員 長南 悠太)

※ CUDBASについては、詳しくは「[CUDBASイントロダクションテキスト](#)」職業教育開発協会編、2018をご覧ください。
また、「[職業教育開発協会](#)」ウェブサイト内に解説があります。

<参考文献>

- 河村 茂雄 (2000)『学級づくりのためのQ-U入門』図書文化社
公益財団法人さわか福社財団編・「学生の地域活動研究会」協力・監修 (2021)
『ボランティア活動報告書の手引き』公益財団法人さわか福社財団
芹澤 和彦 「ルーブリックとは？活用の意義や作成手順、探究学習やグループワークでの活用例を解説」
CASIO「ICT教育・GIGAスクール構想関連コラム」<https://classpad.net/jp/school/column/> (2025.3.20 アクセス)
リクルート進学総研「探究活動におけるルーブリック 小瀬高校 令和5年度版」
https://souken.shingakunet.com/publication/career_g/2024/01/2024_cg449_dl1.pdf (2025.3.20 アクセス)
齊藤 ゆか (2007)『ボランティア評価の国際的到達点とクドバス手法を用いた評価方法の効果性』
日本福祉教育・ボランティア学習学会年報
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jaasi/12/0/12_KJ00005291155/_pdf/-char/ja (2025.3.20 アクセス)
齊藤 ゆか (2022)『＜研究論文＞ボランティア評価学序説—ボランティア活動成果を確かなものに—』神奈川県人間科学部
齊藤 ゆか・寺嶋 正尚・中島 さえ (2024)「ソーシャル活動につながるインセンティブの検討」
神奈川大学学術情報リポジトリ <https://kanagawa-u.repo.nii.ac.jp/records/2000392> (2025.3.20 アクセス)
森 和夫 (2019)
「人材の見える化が可能にする能力開発CUDBAS手法による能力マップ作成で、効率的な人材育成を実現する」企業と人材
<http://ginouken.com/201907/KigyotoJinzai.pdf> (2025.3.20 アクセス)

これまでみてきた、若者の居場所づくりやまちづくり、そして支援者の企画づくりや仕掛けづくりのヒント。読者のみなさまのご参考になっていれば嬉しいですが、きっとまだまだ残っていますよね、聞きたいこと。地域で若者の場づくりに取り組む編集委員の3名が、それぞれの視点でさらに3つの質問に答えます。



回答者

公益財団法人よこはまユース
横浜市青少年育成センター 職員

南 太貴 委員
Daiki Minami

2016年に京都のユースセンター（京都市ユースサービス協会）に就職し、ユースワークに出会う。第3の居場所で青少年と関わりながら、演劇の手法を使った就労支援、知的障害の若者のアトリエ活動、中高生の居場所カフェ事業、社会的貧困家庭の学習支援などに携わる。学生の頃から10年以上ファシリテーションの現場に身を置き、大学のキャリア教育にも従事した経験を持つ。

2020年より多様な青少年支援を実践するよこはまユースに転職。

次世代の人材育成として、大学生の取材ボランティアコーディネーターや性教育を青少年育成者が学ぶワークショップを企画するなど、地域の青少年育成に携わる団体や若者の社会活動の支援を行う。

本稿では参加・参画のアラカルトのうち、CASE01・02を担当。

社会福祉法人地域サポート虹 職員
（横浜市栄区青少年の地域活動拠点
運営受託団体）
フレンズ☆SAKAE 代表

岩堀 まゆみ 委員
Mayumi Iwahori

1999年より子育て支援に関わり、横浜市の親と子の集いの広場事業、乳幼児一時預かり事業等に携わる。

2011年に青少年の第3の居場所として栄区に開設された青少年の地域活動拠点、フレンズ☆SAKAEに開設時から勤務。現在はフレンズ☆SAKAEに加え、こども家庭支援センターにじでの勤務を通じ、幅広い年代の子ども・若者の支援に従事する。

2012年には桂山プレイパークの会を立ち上げ、青少年の遊び場でもあるプレイパークを栄区内で年7回程度開催している。

現在、横浜市内立小山台小学校学校・地域コーディネーター、小山台中学校学校運営協議会委員を務め、学校と地域を繋ぐ活動にも精力的に取り組む。

本稿では参加・参画のアラカルトのうち、CASE03を担当。

小田原市教育委員会 教育委員
神奈川大学 非常勤職員
（社会教育課程地域コーディネーター）

益田 麻衣子 委員
Mako Masuda

2007年より小田原市PTA連絡協議会役員や小学校PTA会長を務め、2012年に市P連会長に就任。2014年に神奈川県PTA協議会副会長を務める。また、こんにちは赤ちゃん訪問員、社会教育委員、図書館協議会委員、同副委員長、市民活動推進委員会委員を務め、2018年には「子どもの育つ環境を豊かに、親のつながりを大切に、みんなで子育てを楽しみたい。」という理念のもと、NPO法人こころみを設立、理事長として活発な活動を展開し、現在に至る。

その後小田原市において教育委員会をはじめ、総合戦略有識者会議、青少年問題協議会、総合計画審議会、青少年未来会議の委員を務め、行政の子ども・若者支援に多角的に関わる傍ら、2021年より神奈川大学社会教育課程地域コーディネーターとして後進の育成にあたる。

本稿では参加・参画のアラカルトのうち、CASE04・05を担当。

「関わり方」の加減

いわゆるコーディネーター的な支援者や地域の大人が意見を言い過ぎることで、若者の活動の選択肢を狭めたり、規定してしまったりしないよう気をつけたいと思っています。とはいえ任せっきりもよくないように感じています…。

若者が主体的に考えて地域に参画できるように、関わり方の加減についてどのように心がけていますか？

My Answer

地域との調整を密に

益田 委員

コーディネート役としては、活動の前に地域との関係を耕しておくことが大切です。例えば、大学の社会教育課程では、より学生を近くで支援する「地域コーディネーター」が、学生の活動に協力いただく地域の方に対し事前にカリキュラムを説明するなどの調整を図っています。

地域側は継続的に学生が地域に入って活動することを期待しますが、実際の「学生」という存在はメンバーの新陳代謝があるので興味の対象は移ろいますし、またそれぞれ多忙な生活を送っています。地域の課題解決という目的にまっすぐに向かう大人に対し、試行錯誤して失敗しながら成長を積むのが若者。失敗にも教育的な価値があることをお伝えしながら、地域のそれぞれの方にご理解をいただいています。

学生との関わり方については、できるだけやりたいこととの齟齬が生まれないよう、学生が考えていることに取って代わらないようにしています。ただ、チャレンジしやすい環境を整えるため、メールのチェックや電話の挨拶文の方法などは指導することもありますね。こういったことも、地域コーディネーターの仕事です。

人間同士として知り合う機会を

南 委員

コミュニケーションについて考える上で、「若者」と一括りで考えず、同じような活動に見えても一人ひとりやりたいことは違うということを理解しておきたいところです。

地域の立場に立って考えてみましょう。例えば、若者と関わりたいという地域は、実は普段関わっていないからこそ、ということが多いので、若者の普段の生活、興味、こういったことを知らないことがあります。一方で、若者がみた地域も同様にわからない存在です。お互いにわからないということが、お互いに利用されているような不信感が生じやすい環境を作ってしまうんですね。コーディネーターとしては、それが解消されないと主体的なものは生まれない、という意味で、大人／若者というより、人間同士として知り合ってもらうことを大事にしています。

地域の方々に若者個人のやりたいことを理解していただきながら様々な活動に伴走するわけですが、例えば同じことばでも、若者は大人と違う想像をしていることがあります。そんなことも含めていろいろと気づいてもらえるようなコーディネーターの関わりが、若者にとってはおもしろいかもかもしれません。

声なきメッセージを逃さない

岩堀 委員

大人の立場では成長してくれたらいいと思うものですが、居場所に暮らすように集まってくる子ども、若者たちは成長したいと思っているわけでも、支援を受けたいと思っているわけでもありません。放っておいてほしい、とさえ思っています。「死にたいと思ったことがない人なんていないわけがない」、そんな会話がある中で、生きようとする、大人になることに前向きになれるように、何かに取り組むきっかけを作る、そういうことを続けてきました。

一人ひとりをみてそれぞれの持つ興味、置かれている状況を丁寧に拾っていき、それぞれのタイミングを外さないように毎日毎日投げかけていく。居場所の性格によっては、そんな関わり方もあります。



「目標」の持ち方

居場所にも、安心できる居場所やユースセンターなど様々な個性がある中で、施策として行政が運営する居場所には、若者の成長や成果、目指す姿といったものが求められる場面もあります。

職員としては人前で話せるようになってほしい、いろいろな企画にチャレンジしてほしいという思いはありつつ、教育の場ではないので「安心できる」ということにとどめ、そもそも成長モデルを作らない方がいいのか…施設によっても分かれている「目標」の持ち方について、ご意見をいただきたいです。

My Answer

目標は日常の「想像」と「失敗」

岩堀 委員

施設としてひとつだけ決めたことは、排除しないということ。違法行為は認めませんが、どんな利用者に対しても相手のこと、人のこと、世の中のことを考える機会をつくり、社会に出たとき困らないようにしていきたいと考えています。

具体的に常に伝えていることは、みんなが安心して居心地よく過ごせるように考えようよ、ということです。よくある場面で言うと、静かに勉強したい中学生、友だちとわいわい遊びたい小学生、両者ともに考えながら折り合いをつけていく。そのやり取りの中で小学生は中学生になるとテストというものがあると知ったり、中学生にはコーディネーターから、あなたもついこの間まであんな感じだったじゃない、と声をかけたり、お互いの状況を想像できるようにコミュニケーションしていきます。

居場所で過ごす時間は多様な人で成り立つ世の中に出ていく前の練習と捉え、コーディネーターが練習だから失敗してもいいんだよ、いろんなことをやってみよう、というスタンスでいることが結果として人間的な成長になる、と考えています。

その日、その場所の若者から

南 委員

目標には、個々の人間的な成長の軸と、教育的に設計されたカリキュラム的な軸があるように思います。自分自身は、その2軸を行ったり来たりして関わられるようにしたいです。

「居場所」は実は難しい言葉で、実際には多種多様です。寺子屋や子ども食堂など、特定の層を対象にしていたり、特定の企画を行ったりしている居場所であれば目標を設定しやすいですが、全ての人に開かれている居場所は若者の成長モデルのようなものを設定しにくいと思います。

ただ、施設はどこでどのようにオープンするかで利用者が変わります。学校の近くで自習場所として利用される居場所ならパーテーションを、繁華街にある居場所にはビリヤードを、という風に、利用者がどのように過ごしたいのかを見極めながら施設のつくりも考えていってはどうでしょうか。支援者側が成長モデルに思いを反映し過ぎると、そこは若者の居場所なのか…？になりかねないので、その場所の、その利用者に相応しい過ごしやすさや安心感を考えていく。その先に持つべき目標や居場所観が生まれてくると思いますよ。

職員が目指すものは持とう

益田 委員

気持ちがある人が立ち上げて運営する、NPO等の取組みとは違う難しさですね。人事の関係で、全く違う仕事をしていた人が担当することになった、予算がついているから進めなければならぬ…そこは行政ならではの思いです。他にも行政の現場からは、予定されているプログラムをやらないと、でも人が集まらなくて、なんて聞かれますが、プログラム自体の実施判断があってもいいのではないかと感じることもあります。

居場所については、若者にその目標を求めるかどうかは別にして、どんな空間にしたいのか行政職員がコンセプトをはっきり持つ方が進めやすいのかもしれませんが。運営するスタッフ全体にそのコンセンサスがあれば、見合った活動ができていくように思います。

岩堀委員の体験談

最初はフレンズ☆SAKAEも、利用者が集まらないこともありました。でも、開け続けていればやってくる子ども、若者が出てきます。自分の居場所にしたい、自分の居場所だと思ふ、そういう人が出てきたとき、その人たちが自身の居心地よくしたい思いが膨らんでいって一緒に場を作ることにつながっていきます。

子どもや若者はそういうすばらしい力を持っているので、信じて待ちましょう。

「連絡方法」のツール

高校生から30代くらいまでの若者ボランティアと活動しています。ある程度の期間にわたって何かを作る、達成するまでの過程で、少しずつ人数が減ってしまうことが課題です。

活動を続けやすいように連絡方法を工夫したいと思いますが、現状ではLINEで個々にやりとりする事業もあれば、LINEグループでやりとりする事業もあります。若者にとってはグループでやりとりする方がつながっている実感を持ちやすいものか、それとも若者同士の人間関係にも配慮して個別にやりとりする方がよいものか…など、若者との連絡の取り方に迷っています。

My Answer

LINE vs 公私の区別

益田 委員

大学生とのやりとりでは便宜上LINEグループを作って進めています。ただ、社会教育の世界は元々仕事と私生活の区別がなくなりやすいもので、他のコーディネーターからは学生から夜中や休みに関係なく連絡が来る、という悩みを聞くこともあります。

密なコミュニケーションは心がけたいものの、SNSではタイムリーに反応しなければ信頼関係が築けないということもあり、難しいところです。Instagramに関しては私生活についても知られるので、仕事として若者と関わっている方々の中にはSNSをどこまで活用するか悩んでいらっしゃる方もいるようです。

グループ向けアプリを使っています

岩堀 委員

ティーンズクリエイションでは「BAND」というSNSを利用しています。個々のやりとりが中心のLINEと比較して、グループでのコミュニケーションの機能が充実しているのが特徴ですね。動画はもちろん、楽譜も共有できるので、それぞれが劇中の歌を自宅で練習するのに役立っています。使いたい機能によって、アプリも変わるかもしれませんね。

利用者からみて情報が埋もれやすいLINEと、区別できることもよいです。繋がりという意味では、結束感のある名前ですね。

「いいね」で反応が返ってくる！

南 委員

学生ボランティアとは、「Discord」というSNSでやりとりしています。「Slack」みたいな感じですが、Discordはメールアドレスだけで参加できたと思います。グループを企画や取材ごとに作り、「zoom」のようなイメージでオンラインミーティングをすることもあります。テキストメッセージも長くなることが多いです。通知されない、といったトラブルも時々ありますが、比較的使いやすいと感じています。

新しいアプリは、コーディネーター側が慣れていないと学生も使ってくれません。先にしっかり準備しておくことと、事前に「必ずリアクションを返してください」と伝えることが大切です。メールとは違い、LINEのスタンプやいいねのように、簡単に返せるというところで彼らにとってリアクションのハードルが下がっていると思います。



事務局より

人数が減ってしまうというところに関しては、ふろふろでは中間報告会、ティーンズクリエイションではプレ公演と、事業中盤で地域の方々が観に来る機会があって、それが活動の刺激になっていました。

例えば大人から見ると100日は短いですが、若者にとっての100日は長いからです。1年間の事業であれば、3か月単位でそういった機会を作っていく手もありますね。

あとがきに代えて

家庭、学校に次ぐ子ども・若者の第3の居場所、地域社会。

「こどもまんなか」時代の神奈川県で、若者の社会参加・参画という視点から好事例を収集した今回の企画は、委員、事務局にとっても多くの学びがある活動でした。みなさんはどのような感想を持たれたでしょうか。

地域を歩くと、まちには若者の日常生活を支援するユースワーカー、地域活動のコーディネーター、あるいは異なる主体の交流を促すファシリテーターとして活動する、多くの人々の姿があります。そしてともに生活し、ともに活動に取り組む多くの若者の姿もあります。こうした方々の情熱を、紙面を通じ感じていただけていたら、そして今後、それぞれの活動の一助としていただけたら、これほど嬉しいことはありません。

今回、取り上げられなかった事例も含め、多くの方々に協力をいただき発行することができました。ご協力いただいたみなさまに、委員一同心より感謝申し上げます。

そして最後に、まだ何者でもなく、可能性に満ちた当事者である若者たちへ。

神奈川県にゆかりのある白樺派の作家、有島武郎が1918年に発表した小説、「小さき者へ」の一節をエールとしてお送りし、結びとさせていただきます。

小さき者よ。不幸なそして同時に幸福なお前たちの父と母との
祝福を胸にしめて人の世の旅に登れ。前途は遠い。そして暗い。
然し恐れてはならぬ。恐れない者の前に道は開ける。
行け。勇んで。小さき者よ。

わかものまんなか社会へ
— 地域参画の事例集 —

発 行

神奈川県青少年指導者養成協議会

企画・編集

公益財団法人よこはまユース
横浜市青少年育成センター 職員 南 太貴

小田原市教育委員会 教育委員
神奈川大学非常勤職員（社会教育課程・地域コーディネーター） 益田 麻衣子

横浜市栄区青少年の地域活動拠点 フレンズ☆SAKAE 代表
一般社団法人地域サポート虹 職員 岩堀 まゆみ

寄稿・監修

神奈川大学人間科学部 教授 齊藤 ゆか

取材協力

COCORUかまくら／鎌倉青少年会館 鎌倉市こどもみらい部青少年課
知る、伝える。ボランティア／横浜市青少年育成センター OB・OG
Sakae Wakamono Creation／フレンズ☆SAKAE 坂本 奈
一般社団法人 FROM PROJECT 竹内 望
ふろふろKananishi 成川 愛花
神奈川県西地域県政総合センター 企画調整課
神奈川大学社会教育課程 かながわユースフォーラム実行委員会

神奈川県立青少年センターユースサポーター
(神奈川県子ども会連絡協議会ユース・リーダーズクラブ)

高橋祐輝 土屋虹平 船松千夏 満井美花

神奈川社会教育士会
公益財団法人 さわやか福祉財団

事務局

神奈川県立青少年センター 栗田 強太郎
指導者育成課 狩野 陽士 長南 悠太 青木 祐樹
山西 康介 坂井 宏彰 壁谷 亜美

住 所 〒220-0044 神奈川県横浜市西区紅葉ヶ丘9-1
U R L <https://www.pref.kanagawa.jp/docs/ch3/ikusei/top.html>

発行年月日 令和7年3月31日

無断複写・無断転載はご遠慮ください©

